

平成3年度(第27次)高校教師海外研修
報告書

平成3年12月

国際協力事業団

広	編
U	R
9	10

JICA LIBRARY



1104915(2)

25045

平成 3 年度(第27次)高校教師海外研修
報告書

平成 3 年 12 月

国際協力事業団

国際協力事業団

25045

序 文

国際協力事業団（JICA）は、国際協力に関する啓発事業の一環として、次代を担う高校生の開発教育（国際理解教育）の現場で、研究・実践されている全国高等学校国際教育研究協議会加盟校の先生方を対象として、昭和40年から海外研修派遣を行なってまいりました。

本年度は、南米に3名、フィリピンに10名、マレーシア・シンガポールに12名、合計25名の先生方に参加していただき、わが国の国際協力の現状や海外で活躍している日本人、あるいは訪問国の経済、社会、教育事情等を視察し、理解を深めていただきました。

ここに、参加者の研修報告を取りまとめましたので、関係各位のご高覧に供します。

平成3年12月

国際協力事業団

総務部長 高野 幸二郎

目 次

1. 参加者氏名	1
2. 報 告	
(1) フィリピン班日程	5
福島県立福島農蚕高等学校 金川 勇次	6
栃木県立足利南高等学校 久保田一志	9
長野県立北佐久農業高等学校 永井 和一	15
三重県立四日市農芸高等学校 田中佐喜男	20
兵庫県立芦屋高等学校 服部 忠嗣	28
私立天理高等学校 第二部 斉藤 仁	30
鳥取県立倉吉西高等学校 楠本 恵子	34
福岡県立八女農業高等学校 緒方 具美	37
熊本県立熊本商業高等学校 斉藤 敦	40
鹿児島県立鹿屋農業高等学校 山内 浩	44
(2) マレーシア・シンガポール班日程	49
私立東北学院榴ヶ岡高等学校 武田 雅道	50
秋田県立十和田高等学校 佐藤千姫子	52
千葉県立成田園芸高等学校 河野 秀二	58
神奈川県立相原高等学校 上治 正美	66
山梨県立農林高等学校 近藤 静雄	69
岐阜県立加茂高等学校 渡辺 緑郎	72
愛知県立春日井高等学校 谷口 武	75
滋賀県立国際情報高等学校 西村 健司	78

京都府立農芸高等学校	吉田 浩美	89
大阪府立泉南高等学校	阪口 光治	99
広島県立安芸府中高等学校	藤井 宏	104
香川県立農業経営高等学校	佐藤 隆宏	113
(3) 南米班 (ブラジル・パラグアイ) 日程			117
富山県立福野北高等学校	千代 佐敏	118
岡山県立東岡山工業高等学校	秋山 伸一	123
大分県立佐伯鶴岡高等学校	兼田 公敬	127

1. 参加者氏名

[フィリピン班]

	氏 名	生年月日	所 属 学 校 住 所	担当教科
1	金 川 勇 次	34. 12. 18	福島県立福島農蚕高等学校 福島県福島市永井川字北原田 1	英 語
2	久保田 一 志	38. 5. 22	栃木県立足利南高等学校 栃木県足利市渋垂町 980	英 語
3	永 井 和 一	42. 12. 10	長野県立北佐久農業高等学校 長野県佐久市岩村田 991	英 語
4	田 中 佐喜男	7. 6. 12	三重県立四日市農芸高等学校 三重県四日市市河原田町 2847	農 業
5	服 部 忠 嗣	23. 1. 14	兵庫県立芦屋高等学校 兵庫県芦屋市宮川町 6 番 3 号	社 会
6	斉 藤 仁	31. 9. 7	私立天理高等学校 第二部 奈良県天理市柚之内町天理高校第二部	理 科
7	楠 本 恵 子	38. 10. 23	鳥取県立倉吉西高等学校 鳥取県倉吉市秋喜 20	英 語
8	緒 方 具 美	21. 10. 15	福岡県立八女農業高等学校 福岡県八女市大字本町 2 の 160	農 業
9	斉 藤 敦	22. 9. 23	熊本県立熊本商業高等学校 熊本県熊本市神水 1 丁目 1 番 2 号	英 語
10	山 内 浩	36. 9. 16	鹿児島県立鹿屋農業高等学校 鹿児島県鹿屋市寿 2 丁目 17-5	農 業

〔マレーシア・シンガポール班〕

	氏 名	生年月日	所 属 学 校	担当教科
1	武 田 雅 道	39. 3. 13	私立東北学院榴ヶ岡高等学校 宮城県仙台市泉区市名坂字天神沢 9-1	社 会
2	佐 藤 千 姫 子	19. 5. 18	秋田県立十和田高等学校 秋田県鹿角市十和田毛馬内字下寄熊 9	英 語
3	河 野 秀 二	33. 2. 16	千葉県立成田園芸高等学校 千葉県成田市松崎 20	農 業
4	上 治 正 美	27. 7. 22	神奈川県相原高等学校 神奈川県相模原市橋本 2-1-58	農 業
5	近 藤 静 雄	7. 11. 4	山梨県立農林高等学校 山梨県中巨摩郡竜王町西八幡 4533	農 業
6	渡 辺 緑 郎	22. 4. 14	岐阜県立加茂高等学校 岐阜県美濃加茂市本郷町 2 丁目 6-78	音 楽
7	谷 口 武	18. 9. 24	愛知県立春日井高等学校 愛知県春日井市鳥居松町 1-55	英 語
8	西 村 健 司	17. 11. 10	滋賀県立国際情報高等学校 滋賀県栗田郡栗東町小野 36	商 業
9	吉 田 浩 美	30. 5. 4	京都府立農芸高等学校 京都府船井郡園部町南大谷	農 業
10	阪 口 光 治	8. 4. 13	大阪府立泉南高等学校 大阪府泉南市樽井 861	英 語
11	藤 井 宏	20. 9. 27	広島県立安芸府中高等学校 広島県安芸郡府中町倉輪多山 372-1	社 会
12	佐 藤 隆 宏	40. 10. 24	香川県立農業経営高等学校 香川県綾歌郡綾南町北 1023 番地	農 業

〔南米班（ブラジル・パラグアイ）〕

	氏 名	生年月日	所 属 学 校	担当教科
1	千 代 佐 敏	34. 2.14	富山県立福野北高等学校 富山県東砺波郡福野町苗島 443	農 業
2	秋 山 伸 一	23.10.16	岡山県立東岡山工業高等学校 岡山県岡山市土田 290-1	地 理
3	兼 田 公 敬	13. 7.17	大分県立佐伯鶴岡高等学校 大分県佐伯市大字鶴望 2851 番地の 1	農 業

2. 報 告

(1) フィリピン班 日程

年月日	日 程		宿泊(ホテル名等)
	午 前	午 後	
08. 21 (水)		13:30 マニラ到着 (PR431) 15:00 JICA事務所 日程打 ち合わせ、概況説明	チャーター・ハウス
08. 22 (木)	9:30 畑地灌漑技術開発プロジ ェクト 11:00 労働安全衛生センターブ ロジェクト	14:00 マニラ科学高校見学 15:30 理数科教師訓練センタ ー見学	同 上
08. 23 (金)	9:30 貿易研修センター見学	14:00 トンド地区ゴミ投棄場 スラム見学 18:00 JOCV隊員との懇談	同 上
08. 24 (土)	市内見学(マラカニアン 宮殿等)	市内見学	同 上
08. 25 (日)	自由行動	16:40 マニラ出発 (PR193) 17:45 タクロバン到着	レイテ パークホテル
08. 26 (月)	9:15 国立航海訓練所プロジェ クト見学	14:00 島内見学	同 上
08. 27 (火)	10:00 タクロバン発 (PR391) 10:30 セブ着	14:00 協力隊員活動視察 (職業訓練所)	アークリードス
08. 28 (水)	9:00 セブ州立大学見学	17:10 セブ発 (PR830) 18:15 マニラ着	チャーター・ハウス
08. 29 (木)	自由行動	14:15 マニラ発 (PR432) 19:15 東京着	

氏 名 金 川 勇 次
所属学校 福島県立福島農蚕高等学校
担当教科 外国語（英語）

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

職業柄教育ということに無関心でいられないので、現地の教育の現状を知ることと、日本に在住しているフィリピンの方々に対して、私たちはある種の偏見の目で見ることが多いので、現地の人たちの生活の様子をこの目で確認し、高校教育の中で生徒達に正しい情報を伝えようとすることに主眼をおいた。また様々なメディアで、日本のODAに対する批判や欠点を指摘する声が多く見受けられるので、援助がどの様に行われ、展開されているのかを視察することも私の主眼であった。

2. 国際協力の現場で参考になったこと、気になったこと。

各プロジェクトでフィリピン人のスタッフが自主的に運営できるように、日本人の専門家が活動なさっているわけですが、円滑に移行することがプロジェクトの成否に係わってくるだけに、今後とも細心の注意をもって協力がなされるように期待したい。

また、フィリピンにおいては社会的なシステムがまだ整備されていないようなので（たとえば交通の問題、ゴミ処理の問題、水道の安全管理の問題等）、このことに係わるような協力がこれから必要になるのではないのでしょうか。

3. わが国の協力がりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

プロジェクトとは別のことになるが、トンド地区のゴミ投棄場については、日本のテレビ局も特集を組んだりして、注目を浴びている問題の一つだと思われるので、1台1,000万円もするゴミ収集車を116台も供与している事実ほもつと知られてよい事実だと思う。また大がかりなプロジェクトだけでなく、レイテ島で見た小学校の校舎のように小中学校の無償建設等の協力も地

味な協力ではあるが、もっと多くの人たちが知ってよい事実である。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること。

まず10月12日に行われる教職員組合の研修会の英語部会において、スライド等を用いながら、研修の報告等を行う。また10月中旬には勤務高校内で、中間審査中の午後、海外研修を行った他の先生方と一緒に、報告会を開く予定である。

また、貴重な体験であるので先生方だけでなく、ぜひ生徒にも伝えたいので、授業を担当しているクラスを中心に、フィリピンについて学ぶ授業を、3～4時間で行うよう計画している。

また、福島県高等学校国際教育研究協議会の機関誌に報告文を寄稿することになっているし、来年度の高国協の東北大会でも発表することになっている。

5. 所感及び意見

(1) 研修時期および期間

福島県では8月26日から第2学期が始まったので、出発日をもう少し早めれば東北・北海道地区でもより参加しやすい環境になるのではないかなと思う。

また期間としては、ちょうど良いのではないかと思います。

(2) 研修日程および訪問先

研修内容については、プロジェクト視察も多方面にわたるものであり、援助を全体的に見まわすことができ大変勉強になったと感じる。また、観光では絶対見ることのできないトンド地区のゴミ投棄場や、急遽設定されたセブ島カルメンでの村祭り（感謝祭）見学等内容豊富で、また考えさせられることが多い研修であり、少し疲れはしたが充実したものであったと思う。

(3) その他全般的な所感

海外に行くということは家庭を持ったり職を持っているとなかなか大変なことであるが、今回多くの方々のお力添えを得て、同じアジア圏の国に行けたことは大変有意義なものであった。日本が飛び抜けて発展してしまったせいも、一見貧しい生活のように思えてしまうが、3、40年前の日本も似たようなものではなかったかと思われる所もあり、今後のフィリピンの発展に関心を持って行きたい。

終わりになりましたが、JICA広報課の小沢さんをはじめ、JICAMマニラ事務所の皆様には大変お世話になりました。どうもありがとうございました。

氏 名 久保田 一 志
所属学校 栃木県立足利南高等学校
担当教科 英 語

ふとしたことから東南アジアの国々に興味を覚え、できるだけ訪れてみたいと日頃考えていた。

今回、その機会を得て国際協力事業団（JICA）主催の本研修に参加することができた。

東南アジアを訪れるのは、インドネシア、タイに次いで3回目であったが、今回は、さまざまな国際協力の現場やそれにとずさわる人々の姿に接し、実に有意義な旅となった。これまで感じてきた疑問や国際理解教育の課題もわずかではあるが自分なりに考察できたように感じている。

1. 出発を前に（視察に際して特に主眼をおいた点）

困難だったフィリピンの情報収集

いざ出かけるとなると、フィリピンに関する自分の知識の未熟さに驚かされた。そこで、さっそく情報収集のため本屋。しかし、手に入ったのは観光ガイドと数冊のアジア関係の本。このことは、すなわち我々の関心の少なさを表している気がして仕方がなかった。ちょうど大噴火していたピナツボ火山のニュースがマスコミをにぎわせていたので、しばらく新聞の切り抜きをしていたが、それほど情報は増えず。数週間後、思い立って東京のアジア関係専門の書店に出向き、ようやくフィリピン関係の本を目にすることができ、少しほっとした。そこで思ったことは、果たしてフィリピンの一般の人々の日本に対する関心はどの位あるのだろうか。また、日本についての情報は豊富なのか、また正しい情報を得られるのだろうか、という点であった。

JICAと国際協力

出発前日の事前研修会でJICA事業とODAの概要について説明をいただいた。さまざまな援助の形があること、日本の国際協力の歴史は浅

く、これからの課題も多いこと等を、参考資料を通して具体的に知ることができた。休憩時間に各課のオフィスを失礼ながら覗き見させていただき、山積みされた資料や働く人々の姿に、なかなか御苦労も多いのだろうと推測した。ちょうどペルーでJICAの専門家が殺害されたニュースもまだ記憶に新しかったのでよけいだったかもしれない。

いずれにしてもこの日、今までよりずっと「国際協力」ということばが身近になったのを感じた。同時に、はやく現地での援助の展開とその実態、日本側職員や協力隊員の状況を実際に確かめたいという衝動にかられた。日本の国際協力については、その重要度が増すにつれ、援助のあり方についての批判も多くなってきている中、私自身もどちらかといえど批判的な態度でとらえていた。しかし、必ずしもマイナス面ばかりでなく、プラス面もあるはず、と思い、滞在中、少しでも多くの援助の良い面をみてきたいという気持ちを強くした。

2. 国際協力の現場で

各種プロジェクトを視察して

今回、視察したプロジェクト事業は次のとおりである。

8月22日 畑地灌漑技術開発プロジェクト（マニラ）

労働安全衛生センタープロジェクト（マニラ）

23日 貿易研修センタープロジェクト（マニラ）

26日 国立航海技術訓練所（レイテ島、タクロパン）

まず驚かされたのは、施設、設備面での充実ぶりである。どのプロジェクトでも先進諸国の研究施設と比べても遜色ないだろうと思われる内容であった。ハード面における日本の技術と協力の水準の高さを実感した。特に国立航海技術訓練所でのさまざまなシュミレーション設備は、まさに海運国日本の伝統と最新技術を組み合わせた成果であるように思われた。「得意な分野で協力できれば最良」と係の方も述べられていたが、今後ますます各種分野での展開を望むものである。

また、プロジェクトのもう一方の柱である相互の人材派遣、交流についても視察した4ヶ所はスムーズにいつている様子であった。人を介した

技術協力はそうたやすく、正確に遂行されるものではないはず。その点、今回訪問した視察先のどこでも、現地スタッフの明るく、前向きな姿勢が感じられたので、形式上ではない、内容のある技術移転が目指されていることを実感できた。

単にモノだけをおくる形だけの援助を避けるためにも、このプロジェクト方式技術協力の展開が今後ますます重要となってくるように思う。また、どれも規模の大きい事業だけに当事国発展の鍵となることもあり得る。従ってこのプロジェクト方式技術協力のより良いあり方を探ることが求められているのではないだろうか。

気になったものとして、建物、敷地の外に目を向けると、道路一つ隔てて密集するスラム街の光景や、途中来るまでの未舗装のでこぼだらけの道路があった。援助が進むにつれて、この内と外の格差が広がってしまうのではなく、少しでも縮められるような協力をすすめてほしいと望まずにはいられなかった。そのためにも当事国の本当のニーズに合った援助を見極め、展開して行ってほしいと思った。

無償資金協力の実際

研修中、実際にみることができ、印象に残ったものを2つ挙げる。

ア. メトロマニラ市内を走るゴミ収集車

市内の通りで目についたものに、処理されないゴミの山があった。聞けば、ゴミ処理の問題は投棄の場所もふくめ深刻であるという。まさに日々の生活にかかわる課題であろう。そんな状態の中、日本からゴミ収集車が贈られ、市内のゴミ収集に活躍している様子は印象深かった。

イ. 小学校に建てられたプレハブ校舎

レイテ島のポロ第二小学校を訪問した際、真新しい校舎と礼儀正しい子どもたちの姿が印象に残った。マニラで多くの働く子どもたちを見ていたので、子どもたちが学校で元気に学ぶ様子は我々にはっとさせるものがあった。校舎は日本の無償資金協力で最近完成したばかりだと校長先生の説明を聞き、有効な援助の一方法であると感じた。教室で話を伺うことのできた担当の先生も、日本に対する

率直な感謝の気持ちを伝えられた。レイテ島といえば、第2次大戦の激戦地であったということで、何ともいえぬ心境ではあったが、この先生とは気持ちよく会話することができた。

青年海外協力隊員の活動ぶり

滞在中、何名かの協力隊員と話す機会があったが、セブ島で活躍する中浜正吾隊員を以下に紹介したい。彼はセブ州立大で水産物加工を指導していた。セブ島でとれる魚介類を製品として出荷できるようになるまでの過程の徹底とシステム作りは、現地の先生、学生等と取りくんでいた。カウンターパートである先生方がみな女性で、相手を尊重しながら指導していく苦勞、モノ、金、前向きな姿勢に欠ける状況の中で、まず何をのぼしていくべきか、暗中模索しながら活動していることなど語ってくれた。まもなく任期が終わるが、できれば延長して現在の任務を継続していきたいという彼の言葉に、任地に根をおろしての地道な活動ぶりが伺えた。

フィリピンでは69名もの協力隊員が全国で活動していた。いずれも専門家の担当する地域に比べ、ずっと不便な地方で単身活動をしていた。また、そこでの活動内容は与えられたものではなく、自ら試行錯誤を繰り返しながら立案し、展開していくという。いわば、まさに草の根レベルでの援助である。その意味で協力隊員の存在の大きさを改めて再認識した。現地の生の声をいちばん知っているのが彼らであろう。派遣後の彼らの声を聞き、どんどん各種プロジェクト等に反映していくことができたならば、現地のニーズにこたえられるより内容のある援助が展開できると思う。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力

フィリピン大学理教科教師訓練センター

フィリピン全国各地の理教科教師を再教育するために、日本の無償資金援助で建物と機材一式が整備され、その後、日本からの専門家の派遣で内容充実がはかられている。フィリピン政府のニーズと日本の得意な分

野での協力が成功し、年々拡充されている様子であった。実際、長期休業中、年間、あるいは夜間に種々のコースが設定され、人気も高いそうだ。先生のトレーニングということで、その成果は子どもたちに還元されることになる。人造りの点においても大変有効である。

ここで活躍する一人の専門家を紹介したい。理科教育専門家の日浦賢一先生である。日浦先生は、視聴覚機器を活用した教材の開発等に成果をあげられた。現地で丁寧に説明していただいた先生の印象は、まさにバイタリティあふれ、任務にかける情熱が大いに感じられた。また、フィリピンの人々と風土に魅惑され、今後もしばらく滞在し、さらに拡充をめざしていきたいと話しておられた。

この協力事業の成功は、日浦先生のような情熱ある日本側の指導援助があったからこそ、との思いを強くし、改めてモノのみならず、人材派遣による支援援助の重要性を痛感した。

日浦先生が援助について我々に述べられた次のことばは、今も記憶に残っている。

— 「ドクドクと血が流れている体に、ばんそうこうを何枚も手当たり次第に貼るような援助はいらない。手術ができるだけの完備した設備と患者のことを本当に考えるスタッフがなによりも必要だ。」

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策あるいは材料として考えていること。

- (1) LHRや国際理解推進委員会(生徒)でスライド、写真を通して紹介する。
- (2) 栃木県高校国際教育研究協議会にて視察報告をする。
- (3) 校内研究紀要等への投稿。
- (4) アジアに目を向ける英語教育の実践。

5. 所 感

- (1) 研修時期および期間
時期、期間とも適当であったと思う。ただし、今回、日程等の案内が送

付されたのが夏休み直前でやきもきさせられた。もう少し、早めに送付いただければと思う。また、事前研修で配られた資料を前もって目を通せば、JICAの理解も深まり、疑問点を明確にして事前研修に参加できたように思う。

(2) 研修日程および訪問先

第8日目のセブ島では思いがけず現地の祭りに加わることができ感激したが、滞在時間が短く大変残念であった。あのような協力隊員の活動場で、現地の人々とゆったりとふれあうことのできる日程が1日でも取れればと思った。その他の訪問先は申し分なかった。特に、マニラでのスモーキーマウンテン視察は大変貴重で考えさせられることが多かった。

(3) 全般的な所感

- ア. わずか9日間であったが、私にとっては大変充実した時間を過ごすことができた。単に外側だけを見てくるのではなく、現地に滞在する方々に触れ、内側からみようとできた点は収穫であった。今後も、この視点を忘れず、機会を見つけ、また東南アジアを訪れてみたい。
- イ. 訪問先で出会った青年(21世紀交流計画で来日)から、先日、早速はがきが届いた。日本への関心の高さが伺えた。フィリピン人の方々の日本への期待にこたえられるよう、個人としてできる範囲で交流を深めていきたい。
- ウ. 英語教師の立場から、フィリピンの第2外国語としての英語教育に学ぶものが多くあるように感じた。そこで現在行なわれているAET(英語指導助手)制度にフィリピンを初めとする東南アジアの英語教師を加えてはどうか。現場では以前より要望もでているので、関係機関で前向きに検討していただき、ぜひ実現できればと思う。
- エ. 今回の研修で、国際協力の現場に携わる多くの方々と出会うことができた。共通して感じられたことは、どなたも他を受け入れる心と実に柔軟な考え方を持っておられる点であった。それは同行した10名の先生方もまた同じであった。

日頃、国際理解教育を高校で担当する一員として、改めてこの柔軟性こそが相互理解の基本であることを確信することができた。今後の実践に今回学んだ点を最大限に生かし、生徒たちにもまた伝えていきたい。

氏 名 永 井 和 一
所属学校 長野県立北佐久農業高校
担当教科

8月21日から29日まで8泊9日という日程で私はJICAのフィリピン研修旅行に参加した。

フィリピンと言われて何が一番頭に浮かぶかというと、今年6月のピナツボ山の大噴火である。外にはバナナ、アキノ大統領と言った所である。あともう一つ、発展途上国であるが故にかなり貧しいのではというイメージがあった。以下は日程に従った研修活動の報告である。

8月21日 AM 10:15 フィリピン航空で日本を出発という事だったが、飛行機が前日のマニラ市内の洪水ということで出発の時刻が1時間遅れた。

雨季ということでマニラに着くと雨が降っていた。ニノイアキノ空港の滑走路の横には貧民街のような建て物がたくさん建っていた。写真では何度も見た事はあったが、いざ自分の目で見てみると、すごいなという感じであった。空港に着くとJICAの派遣員の方が出迎えてくれて、マイクロバスでマニラのJICAの事務所へ向かった。事務所へ向かう途中、一匹の野良猫を見た。その猫はガリガリにやせ細っていた。私にはこの野良猫がフィリピンという国を象徴しているように思えて仕方なかった。又、市内の所々に前日の洪水の様子がうかがえた。JICAの事務所に着いて、所長さんから業務内容、フィリピンという国の概要を聞いた。そして、この日の夕食は所長さんの主催でバンブーダンスなどのフィリピンの踊りなどを見ながら食事をした。食事は魚介類が多く、いかにもフィリピンの料理だなという気がした。

8月22日 午前中、まず畑地灌漑技術開発プロジェクトを視察した。このプロジェクトのすべての物は日本が無償資金協力でやっている

との事だった。ここでは主に干ばつになった時の水の確保などをやっているとの事だった。そして次に労働安全衛生センターを視察した。マニラのJICAの事務所の横で20階立てぐらいのビルの工事をやっていたが、働いている人たちが、いつ落ちてもおかしくないような状況で仕事をしていたので心配したが、このようなセンターがあるので少し安心した。

午後、マニラ市内のハイ・スクールを1校見学した。そこは、フィリピン・サイエンス・ハイ・スクールという名で、フィリピンで一番エリートな学校という事であった。自分としては、もう少し一般的な普通の学校を見たかったのだが、一番エリートな学校を見ることになった。生徒の雰囲気、学校の雰囲気は、さすがという感じであった。休み時間も次の授業のための準備で、廊下で勉強している生徒が目立った。

そして次にフィリピン大学理数科教育センターを視察した。ここは、日浦賢一先生という方のはからいで、最初の予定にはなかったが、急遽見学することになった。ここはフィリピンの理数科教育がかなり遅れているという事で、理科や数学の教師の再教育のためのセンターだという事である。このセンターで一番印象に残ったのは日浦賢一先生のフィリピンの理数科教育開発への情熱というものだった。

8月23日 午前中、貿易研修センターへ行った。ここでは主に、国際貿易、輸出検査、展示業務などを教えているという事であった。ここも日本の無償資金協力で成り立っている所だという事であった。このプロジェクトの契約が今年の11月ぐらいで切れるので、その後どうするかが問題だと言っていた。

そして午後、スモーキー・マウンテンというスラム街へ行った。日本のテレビ局などが取材に来たりして、マニラでは有名なスラム街である。ここは何十年もの間、マニラ市内のゴミが捨てられて、そのゴミが20メートルもの高さの山になった所でスモーキー・マウンテンという名前が付いているそうである。

うわさに聞いて、どんな所だろうと思っていたが、予想通りすごい所だった。ゴミの上に人間が住んでいるという事は信じられない事である。同行の上田さんが、とにかくものすごいにおいだと書いていたが、まあ、すごい臭いだった。着て行ったTシャツに臭いがついて洗うまで臭いがとれなかった程である。山の頂上付近では、清掃車からゴミが捨てられると、そのゴミに人が群がっていた。これは、ここの人たちは毎日捨てられて来るゴミからビニール袋をさがして、そのビニール袋を売って生活をしている人が多いという事である。もちろん、ビニール袋を売った所でたいした金になるわけではない。こういう仕事をしなければならぬのも、失業率の高いフィリピンという国が生み出した悲劇ではなからうか。ただ、私はこのスモーカー・マウンテンの子供たちの屈託のない笑顔、明るさを見ると、何だか自分の心が安らいだような気がした。私はこのスラム街を見たことによって、自分の人生観が変わったような気がした。

8月24日

この日は市内見学であった。まず午前中、マラカニアン宮殿へ行った。この建物は私が想像していたよりかなり小さな建物であった。しかし、中の物はみな素晴らしかった。イメルダ夫人の靴何千足や、ドレスを見た時、私はイメルダ夫人はフランス革命以前のマリー・アントワネットを思わせるような気がした。そして、フィリピンもフランスと同じように革命が起きたような気がする。そして午後は、外国人専門のおみやげ屋へ行って買い物をした。又、マカティ地区にあるフィリピンで一番大きなデパートへ行って買い物をした。フィリピンで一番大きなデパートといっても日本のデパートと比べれば、かなり小さいデパートであった。そして、この夜は、そのデパートの近くにあった映画館へ行って映画を見た。料金は、なんと14ペソ、日本円で70円であった。値段につられて見に行ったようなものである。

8月25日 この日は午前中が自由行動で、午後、レイテ島のタクロバンへ向かった。タクロバンの空港に着いた時、この空港は小さな空港だなあと考えた。ターミナルも非常に小さいし、何か閑散とした感じであった。そしてこの晩、Seasideレストランという所で食事をした。文字通り海辺のレストランで新鮮な魚介類が多く、海草なども出て、とてもおいしかった。

8月26日 レイテ島2日目である。午前中、国立航海訓練所を視察した。フィリピンには20万人もの船員がいるといわれていて、その人たち（ごく一部ではあるが）を教育している場だという事である。ここでは主に船舶運航技術のレベルアップを図るのが目的だという事である。船員が多い国には非常に重要なプロジェクトであると思った。

午後は島内見学という事で、島内のいろいろな場所を見学した。小学校も見た。プレハブの校舎で明るく勉強している子供達の姿が印象的であった。この島は太平洋戦争の時、かなり激しい戦闘が行われたそうで、島の各地に戦争関係の物が残されていた。マッカーサーの記念碑などがそれである。

8月27日 午前中、タクロバンを出てセブ島へ向かった。セブ島はさすが観光都市だけあって、かなり発展していた。ただ、セブ島もマニラと同じでかなり交通渋滞が目立った。ホテルに着いてから昼食をとり、セブ州立大学などを見学した。

夕食はホテルの近くのシーフード・レストランで派遣員の方たちと一緒に食事をした。そして食事が終わってしばらくしてから、派遣員の人達と数人でセブの街へカラオケに行った。そのカラオケに行く途中、初めてジブニーに乗った。入った店は日本語がかなり話せる店員が多かった。きっとその人達は日本に働きにきていたんだなあと考えた。深夜出歩いたりしたが、セブはマニラに比べて、かなり治安は良いようだった。

8月28日 この日は、セブ島でお祭りがあると聞いたので、行ってみた。フィリピンのお祭りも日本のお祭りのように出店が出たりして、どこの国もお祭りというのは同じだなあと考えた。そして午後は民芸品店で買い物をした。ただ、セブ島の民芸品店はマニラと比べて値段が倍ぐらい高いような感じだった。買い物をしてその後ビーチへ行った。マニラ湾は汚なかったが、フィリピンの海は全体的にとってもきれいである。セブのビーチもすごくきれいである。私は生まれて初めて青い海、白い砂浜を見た。そして、ここで貝のペンダントを売っている少年と出会った。初め300ペソと言っていたペンダントを100ペソで買った。妙にその少年に親近感がわいて、いろいろ話しをした。いろいろ話しているうちに、サンゴと私の時計を交換しようと言われた。私のダイバーウォッチがよっぽど珍らしかっただろう。私も少年のサンゴがきれいで素晴らしいと思ったのでいいなあと考えたが、時計が大切なのでやめた。そして夕方の飛行機でマニラに向かった。

8月29日 旅行最後の日である。午前中、少し自由時間があつたので、ホテル近くのスーパーマーケットでマンゴジュースを買ってきた。そしてマニラのJICA事務所で荷物をまとめて空港へ向かった。免税品店で少しおみやげを買った。成田に着いたのは8時ぐらいだった。1時間近く遅れての帰国である。

私はこの9日間の旅で、フィリピンという国が非常に身近に感じられるようになった。そしてJICAの人達のひたむきな努力、貧しいながらも明るく生きていくフィリピンの人達の姿に感動した。これを機に国際協力、フィリピンの実情などを生徒に教えていきたいと思う。

氏 名 田 中 佐喜男

所属学校 三重県立四日市農芸高等学校

担当教科 農 業

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

(1) フィリピンの国花サンパギータ（モクセイ科。アラビア、インド原産の常緑のかん木。熱帯、亜熱帯に広く分布。ジャスミンの仲間では花をつなげてレイにする。）という名前にひかれて、近くて遠い国であったフィリピンを自分の目でみて、よく知ること。

（フィリピンの自然、産業、日常生活、歴史、経済、教育、日本人に対する考え方。等）

(2) ODAにおける開発途上国への援助は増加の一途をたどっているが、技術、資金援助の現況がどのように役だっているのか、その実状をフィリピン国という具体的な国において知ることと、今後の課題は何かを知ること。

(3) JICA職員ならびに青年海外協力隊員の活躍ぶりを知り、現場で実践されている立場から生の声を聞いて、自分なりに把握し、今後の開発教育に生かしたいと思う。

2. 国際協力の現場で

(1) 参考になったこと

☆ サンパギータとヤシの実

マニラ空港に到着。JICA出迎えの小型マイクロバスに乗り市内へ。先ず驚いたことに中央のセンターラインが消えている道路。2車線（右側通行）に3列、時には4列も連なる交通渋滞。これで事故がないとすれば七不思議の一つになろう。タクシー、乗用車は日本でみられるトヨタ、ニッサン、ホンダ等の中古車にフィリピン独特のジープニー（軍用

車ジープをすさまじいまでに外装を飾り立て大衆車に改良したものという。新車両も手造りで生産され、現在エンジンは日本製ジーゼルが主流だそう。料金システムはバスと同じ。乗車は拳手、降車は天井を叩くという。庶民の足になっている。)には満員の人が乗っている。交差点で車が渋滞した時、止まっている車に、新聞、タバコ売り、その中に子供がサンパギータの首かざりを売っている姿が目につく。(これらの人々はこれで生計を立てているという。)

サンパギータという名前を初めて耳にした時、その響きには情熱と哀愁が交錯しているように私には感じられた。2日後の夜、夕食のためにレストランに向かう途中で子供等(10才前後)のサンパギータの声に立ち止まる。つぼみをナイロンの糸に1つずつ針で紡いだサンパギータの首かざり、1ペソ、1ペソと私にかわいい手で差し出す。思わず手にした私はその少女から3つを受取り5ペソを支払う。マカティ地区の繁華街の一角であったが、少女達と花の甘い香りとネオンの嬌声が通りをせつなくするようだ。一説によるとマニラの中心部、ストリート・チルドレンは5万人以上だという。国花サンパギータはこの国の抱える問題を象徴する一面であろう。

マニラ滞在5日間には咲き乱れるサンパギータの樹にはお目にかかれない。街角の植え込みに植え込まれているかと思ったがそれも無い。見学先で訪ねたが郊外にしかないという。私はがっかり。ところがレイテ島タクロバンで航海技術協力の専門家菊地氏にお会いした夜その話をしたら、私の庭に数株あるという。明朝6時半に迎えにくいといううれしい言葉。菊地さん宅の庭のサンパギータ、低花木で咲き乱れた花と朝露のしずくをつけた堅いつぼみ、手の中で甘い香りを放つ。マニラで少女から手に入れたサンパギータとは異なるように感じ、数枝を切り取り日本に持ち帰った。成田の検疫も通過、しかし切り取ってから4日間たっていたので挿し木はしたが発根するかどうかさだかでない。

菊地さんの借屋 一敷地約500坪、洋風平家建て70坪、庭には草花、花木、果樹(サントール、カラマンシー、ジャックフルーツ、ガバ、マユバ、チーコー、ランプータン、パパイヤ、マンゴー、ヤシ等。)が植えられており、メイド2人、庭番1人、運転手1人、夜はガードマン1人

雇っているという。一見、金持ちの日本人。すべてJICAの借り上げと伺う。身の安全のためとはいえ、相当な支出であろうというのが私の感想。

庭番氏、数mのヤシの木にするすると上り、青いヤシの実をもぎ取り、するすると降りるが早いかナタで上手に割って5cm位の穴をあける。飲むようにすすめられて切り取ったヤシの実から直接飲む果汁、冷たさと香り、ほのかな甘味、今でも忘れられない。クラス生徒と競争して昇り、ヤシの実を取る夢を見る。(レイテ島は第2次世界大戦の激戦地。海岸から山手までほとんどがヤシの木。一部には水稻が見られる。特に島には産業もない。)

☆ 青年海外協力隊員との懇談

600年ぶりといわれるピナトゥポ火山(1,740m)の大噴火が起きてから5ヶ月が過ぎた。わずか16kmしか離れていないクラーク米軍基地は使用不能で撤収されるという。(雲仙・普賢岳の噴火、災害に比べて数百倍の被害という。)フィリピン政府の調べだと被害を受けたのは65万人。(14万世帯)48万人が食糧配給対象。うち12万人が学校や公民館などを使った避難センターに収容されている。深刻なのは火山灰をかぶった農地の被害6万haでこの地帯は有数の穀倉地帯で、最近果樹、野菜栽培も導入され、国内生産の8%を占めている。損失は80億ドルといわれる。

愛知県半田市出身の黒川千賀子さんはピナトゥポ火山より13kmしか離れていないカキリガン村で食生活、栄養改良、衛生教育の指導にあたっておられる25才の独身女性である。大噴火の3日前に全員の避難命令が出され村民共々、40km離れた安全地に避難したという。避難地ですら5cmの火山灰が積もったという。(よほどの確な火山情報を得、住民に伝達されたものだ。)

黒川さんは高校時代、親友の両親があい次いで亡くなられ、友の悲しい姿を見る時、自分はこれでよいのだろうか。助けてあげることが出来ないだろうか。そのとき何もできなかったことを思い出し、自分の力を試し、人々の助けになればというのが協力隊への応募の動機であったとい

う。私とカキリガン村の人々とは生活環境の違い、考え方の違い、言葉の通じないもどかしさもあって、最初はなかなか溶け込めなかった。食事⇨右手、トイレ⇨左手、を使用。紙なんてない。大便は野ざらしである。先ず最初⇨土をかぶせること。伝染病の恐ろしさを教え、食事前に手を洗うことから始め、子供たちを集めて、少ない給料の自前で料理を作り、子供等と一緒にワイワイガヤガヤの中からとけこみ、今では少し衛生の観念も根つき始めた。その矢先、ピナトゥボ火山の大噴火、村民共々の避難は大変であったが、避難地での生活は今まで以上に大変である。協力隊員の身の安全のため、現在はマニラに滞在中である。これから現地にもどり、マラリア、B型肝炎、結核、下痢、子供等の栄養失調対策に取り組むという。ご苦労さんだが頑張ってください。

(2) 気になったこと

☆ Smoky・Mountain と政治

(地名=Balotuto Tondo Manila =ゴミ投棄場=スラム)

マニラ湾にそそぐデービス川のほとり、40数年前から、ゴミの投棄場となり、現在15万ha、ゴミの高さ22~25m、そのゴミの上(国有地)の住人、400世帯、2,500人という。そこに住む子供等1,000人以上。毎日のように死亡。(小学校入学前に30%が死亡)

案内役、元青年海外協力隊OBの上田氏(現在は現地キリスト教の牧師たちとボランティア活動をしている。)の話聞きながら見学。道路はぬかるみ、強い悪臭、トラックで運ばれたゴミ。(なにもかも一緒くた)ゴミを降ろす。⇨ブルドーザーで積み上げる。⇨その中からビンやカンを拾い集める。⇨ビン、カンを売って生活の糧にしている。小雨降る中、びしょぬれになりながらの作業。大人、子供、男女。皆が一生懸命である。

乾期になればガスが発生。火をつければいつまでも燃えている。これからくる俗称⇨Smoky・Mountain。臭い、汚い、危ない。=スラム街。この住人は現在3世代目になるという。ここが故郷である。大学卒業生もいるが男はイレズミをしている。差別意識が強く、就職も儘にならないという。100ペソあれば10人の1日分の食費である。8ペソでシン

ナーを買い、それを吸う。今よければそれでよし。明日のことなど考えない住人も多い。

そんな状態の中で、見学中に寄ってくる子供等の笑顔。乞食のような物乞いの態度は全くない。それはなぜだろう。明日の命すらわからないという子供等にその笑顔がある。それは神の救いなのか。生きていくという原点なのか。たくましさの現われなのだろうか。私にとって強烈な印象を残す。

フィリピンはアキノ政権発足以来任期終了まで1年足らずという。このところ側近の辞任。相次ぐクーデター騒ぎ。湾岸戦争の影響。自然災害。(台風。火山の大噴火。)等で、経済不振も慢性化しており、治安も一層悪くなっているという。環境汚染問題への取組。スラム街の解消。失業対策。経済発展のための外国資本の導入等あげればきりが無い。これらすべて発展途上国の抱えている諸問題である。

☆ 日本の政府開発援助（ODA）

日本の開発援助（ODA）の1990年度の実績は92.39億ドルでこの中でアジアへ60%、アフリカへ15%、その他15%となっている、と発表されている。日本円にすると13,000億円余、国民1人当たり1万円余の負担で多額の援助ということになります。援助というものは援助を無くすための援助でなければならないが、相手国の依存度を高め、更に援助を必要とするような悪循環を招いているとも聞く。（例、地域開発無償援助で日本の最先端施設、設備が導入され、故障する。更に日本から調達する必要がある。外貨がない。再度スペアの部品を買うための援助）

ODA予算は結局、日本に還元され日本の企業がもうけているとも聞く。（また昨年度はODAとは別途に、湾岸戦争のため90億ドルの負担をしている。） ODAは世界の国々の特に貧しい人々が最大の受益者となるべきだと思う。しかし残念ながら一番貧しい層に行き届かないという問題がある。相手国の官僚機関の硬直。また為政者の腐敗などがあげられ批判的になっている。国際社会におけるJICAの役割は重要であり、輝かして実績がある。しかし、これからも一番貧しい人々が最大の受益者となるようなプロジェクトの実現に努力されることを望む。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

開発途上国への経済協力として政府開発援助（ODA）のうちフィリピンにおけるJICA技術協力の概要（JICAの仕事の分野）について今回の視察からえた一部を紹介する。いずれも日本の最先端技術を生かした援助、協力によってできた施設、設備は立派なものである。

（実施中のプロジェクト方式、技術協力事業の概要）

◎ フィリピン畑地かんがい技術開発計画・プロジェクト

フィリピンの農業生産物の中心は食糧としては米とトウモロコシで、米は自給がやっただが、トウモロコシを中心とした他の作物は依然として不足している。これらの対策として、かんがい水田の乾期作（12～5月）としてトウモロコシの導入による総合自給の達成、都市化とともに需要の増した野菜の導入を計って農家収入を上げること。そのための研究、技術開発への協力である。

協力内容

1. 畑地かんがい技術開発に係るデータ、情報の収集、分析。
2. 適正かんがい方法、作物の多様化に資する栽培技術などのための圃場研究の実践。
3. 計画、設計基準の策定。
4. 技術研修の実施。

1987年～1992年にわたって専門家、延34名派遣。機材供与、2億円余。研修員受け入れ等の協力をおこなっている。

◎ 労働安全衛生センター・プロジェクト

フィリピンにおける労働災害は、近年の工業の近代化に伴い機械、化学物資等の導入により、労働環境が急激に変化したこと、建築工事等の増加により、労働災害、職業病が増加している。このため労働安全衛生センターの設立の無償資金協力とプロジェクト技術協力を我が国に要請したものである。

協力内容

1. 健康管理
2. 環境管理部門
3. 安全管理
4. 研修・広報 の部門

1988年～1993年にわたって専門家、延35名派遣。

◎ フィリピン貿易研修センター・プロジェクト

フィリピン政府は貿易振興に寄与することを目的とする貿易研修センターを設置して、貿易実務、輸出検査、展示業務等に精通した人材を養成する。このことを目的に日本政府に無償資金協力と技術協力を要請した。24.32億円で研修設備と同時に見本市として利用できる展示ホールも備えた立派なものができている。

協力内容

1. 貿易研修。(含む商業日本語)
2. 試験検査研修(繊維製品、家具、食品)
3. 展示研修

1987年～1992年にわたって専門家、延37名派遣。1億円以上の機材供与等の協力がなされている。

◎ 国立航海技術訓練所・拡充プロジェクト

フィリピンは多数の船員労働力を外国船に供給しているが近年各国の海運界では船舶の安全運行、安全基準に関する所定の知識及び技能の習得が必要とされ、その資格要件を欠く船員は外航船への乗船が困難である。フィリピン政府はそれを拡充するために日本政府に無償資金協力、及び技術協力を要請した。37億円を投じ、訓練所施設と設備が拡充された。

協力内容

1. 向上(再教育) — 航海士、機関士。
2. 航海、機関向上 — モジュール化

1985年～1992年にわたって専門家、延30名派遣。3億円以上の機材供与等の協力がなされている。

以上のプロジェクト協力の他に個別専門家派遣事業も多数実施されている。

(農地整備、航空無線、道路計画、警察鑑識、投資促進、技術教育等。)

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

- ◎ 先進国として開発途上国への経済協力の現状と実態を少しでも理解できるように具体的な例をあげて生徒の理解を深めたい。(ODAとJICAの事業の実績について)
- ◎ 開発途上国、フィリピンの自然と日常生活、歴史、経済、教育の現状について、今回の視察で得た具体的な事例および写真スライドを通じて説明し、より理解を深めるとともに少しでも先進国に近づこうと努力しているフィリピンの人々の姿を紹介してゆきたいと思います。
- ◎ 日本の最先端技術の教々を派遣された専門家や青年海外協力隊員の方々の熱心な根気強い指導でかなり高度な品物を造ったり、データをだしておられる姿を見、実践、活躍されている人々から教育の重要性を知り、これからの高校生への開発教育の一環として生かしたいと思います。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

研修期間については問題はありません。しかし、実施時期については、帰国後の余裕が欲しい。少なくとも研修の整理やレポートの関係から8月25日までに帰国できる日程を組んでいただければ幸いである。

(2) 研修日程および訪問先

具体的で盛り沢山の訪問視察。計画されたものでよかったと思いますが、欲をいえばもう少し時間的な余裕がほしかったように思います。

(3) その他全般的な所感

各ホテルともツイン部屋を1人でなく、他高校の先生と同室でよい。経済的な面、他府県の先生方との交流、会話、親睦、その日の視察の整理等ができるので2人のほうが好都合である。

氏 名 服 部 忠 嗣
所属学校 兵庫県立芦屋高等学校
担当教科 社 会

1. 視察に際して特に主眼をおいた点

フィリピンの経済は極めてよくない状況にあります。フィリピンの人々の生活が如何なる状況にあるのか、この目で見て来たいと考え、参加させて頂きました。

スモークーマウンテンは、私の想像を越えるものがありました。人間が生きること、生きていくことが、何んなのかと考えさせられました。今もって、答は出ていない状態です。あの現状が、何時変わるのか、変わって来るのか。我々のすべきことはあるのか。どうしようもない気持ちと、偽善はいけないという心が、私の胸の中から抜けていません。あの帰りのバスの中で、あの子ども達は明日はどうなるのか、その次の日はと、思っていました。今も思っています。しかし、なすべきことは何か、まだ分かりません。

2. 国際協力の現場で参考になったこと、気になったこと

協力隊員の皆さんの献身的な姿は、特に若い皆さんの活動ぶりは、もっと多く日本で紹介し、更に多くの協力隊員志望者を作ることが大事だと思います。気になったのは、彼ら協力隊員の方々の帰国後の生活です。「就職の方、よろしく」との声、あとの保障を考えて頂ければと思います。

3. わが国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

協力、プロジェクトはすべて、無理解と、誤解が、国内にはあると思います。協力、プロジェクトをもっと積極的に、紹介し、あらゆる方面にアピールすることが必要だと考えます。

どのプロジェクトも、各方面の役に立っていることは事実ですから。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

教科、その他の指導に、今回の研修は大変に役に立ったと思います。初めての海外で、私の外国観（おおげさですが）は少し変化しました。日本の恵まれた環境の中での教育を受けている生徒は幸せです。フィリピンの現状のほんの少しですが、垣間見た私は、生徒に話すことが変わって来たのを感じています。具体的には現代社会（今は教えていません）の中で、今回の研修をまとめ、教材として使っ行って行こうかと考えています。

今はスモークーマウンテンでの自分の考えたことを生徒に話しています。

（生徒は真剣に聞いています。）

5. 所感及び意見

(1) 研修時期および期間

研修時期は8月の初旬が適当かと思われます。下旬は9月からの授業等のことがどうしても気になります。

期間は適当です。

(2) 研修日程および訪問先

日程は良かったと思います。

訪問先は、もっと北の方（ルソン島の）へも連れて行って頂ければと思います。

(3) その他全般的な所感

大変、私にとって有意義な研修でした。初めての海外ということで、不安だらけでした。緊張もしました。これは帰国するまで続きました。

帰ってからも、ある種の緊張は続いています。

外に出ることは、人の気持を変えます。

氏 名 齊 藤 仁

所属学校 天理高等学校第二部

担当教科 理 科

1. 視察等に関して特に主眼をおいた点

奈良県国際教育協議会の役員をつとめさせて頂くようになって3年になる。自分自身の国際理解の乏しさを痛感する中、今回の高校教師海外研修派遣の推薦を頂いた際には、この上ない好機と思い、喜んで参加をさせて頂いた。日本の経済発展がめざましい昨今、国際的役割を果たすことの重要性が今日ほど叫ばれたことはない。日本がODA等を通じて国際的援助をしているのは知っていても、その具体的活動がわからない。また、その援助が本当に相手国の人々のためになっているのかという不安もある。特に、我国で公害問題が激発し社会問題になった経緯を考えてみても、発展途上国で同じことが繰り返されてはいないかという疑問もある。出来得る限りその実態を知りたいというのが私の参加目的であった。

国際理解の第一歩は、その国の文化を好きになることだと思う。フィリピンの人々と少しでも語り、食事を味わい、美しい景色や人々の生活ぶりをこの目で見ることも大きな楽しみだった。

2. 国際協力の現場で

(1) 参考になったこと

8月20日は東京で、8月21日はマニラで、それぞれJICAの事業概要の説明を受けた。詳しいデータをもとに日本のODAの規模、アジアにおける貢献度の大きさについて理解する。フィリピンでは特に産業の発展に力をいれていることがわかる。貿易研修センターや労働安全衛生センターがそれである。失業率20%といわれるこの国で、なるほど必要な実践である。今一つこの国で重要なのは教育の充実であろう。フィリピン大学構内にある理科教師研修センター運営の中心になっている日浦専門家より、教育協力による人づくりに貢献する必要があることも教えら

れた。

(2) 気になったこと

労働安全衛生センターや畑地灌漑技術開発プロジェクトを見学した際、その施設のすぐ外に住む人々の生活が余りに粗末で対照的であった。この施設建設の際、先住民の人達とトラブルはなかったのか。他の各種開発計画の実施計画についてと同様、先住民との協調が十分図られているか知りたかった。

労働安全衛生センターでヘルメットの強度検査をやっていても、実際の工事現場では、夜真っ暗になっても明かりも灯さず、ヘルメットも被らずに高層ビルの建設作業を行い、裸足で道路の舗装工事をする姿を何度も見て、理想と現実のギャップを感じた。

フィリピンで取り組まれる多くのプロジェクトの中で、開発計画はいくつもあるが、環境保護のそれが見られない。例えば、マニラで走っている多くの車は日本製だがほとんどが中古車として日本から輸出されたもので、我国で排出規制をクリアーできないものばかりという。マニラの10年後の空気の汚れを憂う。

フィリピンは確かに発展途上国である。しかし、どんなスラムにも食べ物の店は多く、スーパーには豊富な食糧がある。この国に飢えて死ぬ人は少なからうと思う。ODAの援助の中に中所得国が多く、飢えに苦しむ人の多い低所得国が少ないのはなぜだろうか。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

どのプロジェクトも熱心に取り組まれているが、私が一番感心したのは失業者対策として職業訓練センターで指導に当たる青年海外協力隊のメンバーだった。センターでは研修を受けるのは、経済的理由などで小学校へ行けなかった若者がほとんどで、自動車組み立て・テレビ組み立て・縫製などの訓練に励んでいた。貿易を盛んにし、輸出を伸ばすことも大切だが、今現在、仕事のない人々に力をつける世話どおりも同様に大切なことだ。マニラ郊外トンド地区は30年間もゴミの投棄場として使われ、その広さは18 haに及ぶ。

発酵して出る煙りから『スモーカーマウンテン』と呼ばれているが、この地域の衛生環境は極めて悪い。学校にやってもらえない子供がほとんどだ。人人は、ゴミの分類と回収で生活の糧を得ている。協力隊元隊員の上田青年は、ここで寝泊りをして人々に職業訓練を施す。現在、石鹼と洗濯板を製作して現金収入を得ることによって積極的に生きる道を教えている。上田青年がこの地域の人々に、どれだけ信頼されているかはいうまでもない。

4. 今後の教育指導に生かす具体策、あるいは材料として考えている事

発展途上国でフィリピンの人々と共に歩む協力隊の人達、専門家の人々の姿は尊い。今現在の自分の楽しみをのみ求める若者が多い中、人のために自分に与えられている力を発揮しようとする姿を、私の預かる生徒たちにもぜひ伝えたい。

スモーカーマウンテンの人達は明るかった。言葉は違っても、あいさつしたら笑顔で返してくれたし、子供達の目はキラキラしていた。バスケットやギターを楽しむ中に私達も入ったほどだ。どんなに貧しくても生活意欲をもった親たちと共に暮らし、地域の人々に見守られる子供達の姿は、少し前の日本にもあったことである。豊かさや個人主義の中で私達の置き忘れた大切なものがあつたのだ。

この国では物を大切に使う。車は手入れに手入れを重ね、めったに廃棄はしない。現地の方はレストランでも物を残さない。どこの建物の中でも照明は暗く必要以上には使われない。物を大切にすることを忘れた我国の鏡である。フィリピンから帰って、国際援助とは何なのか自問自答する。渡航目的の半分である日本の援助の姿は見てきたが、もう半分である援助のありかたについてはついに解答を出せずに帰って来た。それは、フィリピンの人々にとって幸せとは何なのかがわからないからなのだろう。しかし、研修を通して自分の中に強い問題意識は生まれた。我国が援助し、産業の発展と教育の拡充に寄与しているつもりが、果して国民の底辺にまで役立っているのか。人道的援助にとどまらず、(我国に都合の良い)経済的援助や(我国に都合の良い)政治的な援助につながるものとして実施されてはいないかという視点をもって国際援助を見守る姿勢も大切ではないかと思う。

以上のような観点にたつて、校内新聞への投稿、奈良県国際教育協議会での研修報告など、様々な機会を利用して、国際理解を共々推し進めていきたい。

5. 所感および意見

研修時期は学校によって都合があろうが私にとってはちょうどよかった。また、期間は適当で、これ以上長いと体調を崩す人も人て来ないとも限らない。私自身、帰国1日前におなかをこわしたが、これも研修真っ只中だったら大変だったとぞっとする。

研修日程と訪問先については綿密に検討して下さっており、満足のいくものだった。都会のマニラ、農村のタクロバン、観光地のセブに根拠地をもって研修したことはそれぞれの町の特徴がわかって、とてもよかった。また前半、ややタイトスケジュール気味だったが後半、ご配慮頂いてありがたかった。日系の企業がどの程度フィリピンの環境や先住民に配慮して事業をしているかも見学できたら良かったと思う。

ホテルの宿泊は1部屋1人だったため、自分の時間が自由に持てて良かった。とくに体調が悪くなった人が1人も出なかったのは、1部屋1人で各自の体調の調整がしやすかったからかとも思う。

最後に今回の研修に際して終始熱心に世話どりして下さったJICA関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

氏 名 楠 本 恵 子
所属学校 鳥取県立倉吉西高等学校
担当教科 外国語（英語）

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

- (1) 授業（特に「外国事情」の時間）でフィリピンを扱う際の資料を集めること。

テレビや新聞で見聞きする政治経済面以外のフィリピンの姿、具体的には、現在の衣食住、娯楽、物の価値、交通状況等を生徒達に伝えたいと思っていました。そのため、フィリピンに関わっている人達の話、新聞、雑誌、音楽テープ、本、写真等の「教材」を手に入れることに特に心を傾けたつもりです。またそのことにより、フィリピンに対する自分の考えをはっきりさせることができるだろうと考えていました。

- (2) 移住、出稼ぎという人の流れに以前から興味を持っていました。フィリピンが国家的に海外出稼ぎに取り組んでいることを聞き、それはなぜか、又今後その状況はどうなるのかを、今回の研修中にいろいろ見聞きして考えたいと思っていました。

2. 国際協力の現場で

- (1) 参考になったこと

人材育成に大きな力を入れようとしていることは、学校関係者としてとても印象に残りました。日本側のスタッフだけの活動ではなく、フィリピン側のカウンターパートを育てておられるのはとてもいいことだと思いました。JICA事務所で見せていただいたVTRの中のことは

If you want one year's prosperity , grow grain . If you
want ten year's prosperity , grow men and women .

が国際協力の場で実現していくといいなと思います。

(2) 気になったこと

無償供与に際して、専門的な機械であるために日本製が多くなるのは仕方ないと思いますが、机や理科の実験用の電圧器にいたるまで日本製をそろえなくてもよいのではないかと思いました。日本製品を買うお金で現地の製品を買えば、その国の経済が少しでもうるおうことになると思います。品質の面で問題があっても、ある程度指導を継続するなどして現地調達を増やすことはできないのでしょうか。最終的にその国の産業振興にもっと結び付く援助にならないものかと思いました。大きなコンピューターからガス管にいたるまで、日本の企業名がついていたのが気になりました。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考える協力、プロジェクト等

理数科教育開発研究所 (UPISMED)

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

具体的には、さっそく「外国事情」の授業でフィリピンを扱っていますので、そこで非常に役立っています。

本校では1学年6クラスですが、うち1クラスは英語コースです。英語コースの2・3年生は週に1回「外国事情」の授業があります。進度の遅れている2年生は10月以降になると思いますが、3年生は9月からフィリピンについて、3回計画で授業を行っています。

材料としては、1の(1)にあげた物品、訪問先でいただいた資料、研修中にいろいろな所でうかがった「フィリピンの良いところ、悪いところ」の話等を考えています。

又、「外国事情」以外にも機会あるごとに、クラス、クラブの場でフィリピンについて生徒達に話をしています。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

適切だと思います。

(2) 研修日程および訪問先

自分の専門にこだわらず、いろいろな所が訪問できて大変よかったと思います。

(3) その他全般的な所感

広報課の小沢さんをはじめ、JICAフィリピン事務所の方々、訪問先の方々に大変お世話になりました。心から感謝しております。おかげさまで個人の旅行では決して見ることのできないものを、様々なところで見せていただきました。

以前は、フィリピンと聞くとどうしても重いイメージが浮かびがちで、「外国事情」の授業をどう構成するか困っていました。現在は自分の中でフィリピンの姿がはっきり定まり、良いところ、改善すべきところを堂々と生徒達に話せると思っています。

また、見せていただいてそれっきりではなく、今後自分がフィリピンのために何ができるのかも考えさせられました。たとえ今は「学校は出たけれど……」という失業率の高い状況があっても、ここで教育のてをぬけば将来の発展は望めないと思います。様々なものを見せていただいた中で、自分でも何かやりたい、何かできるのではないかと思ったのは、人材育成でした。幸いにも、ここ倉吉で、民間の人が奨学金をつのってフィリピンから留学生を招いています。現在は洋裁学校のみですが、将来はもっと範囲を広げようとしています。私はこれまで以上にこの活動に協力していきたいと思っています。

氏 名 緒 方 具 美
所属学校 福岡県立八女農業高校
担当教科 農 業

本年度の国際協力事業団からの計画、日程の中に農業関係の視察が入ってなかったのと、私自身参加するとしたら、海外初体験と言うこともあり学校長からの話しがあった際、躊躇しましたが、参加した今振り返ってみますと、自分の人生観が変わるような、いや変わらざるをえないような、貴重な体験を有難うございました。事業団の先生方各位に心から感謝しておりますと共に同行しました先生方には大変お世話になり重ねてお礼申し上げます。

さて私自身フィリピンの農業の実態をこの目で見てみたい、そして、よしんば、諸作物の品種改良の状況や、農業基盤の整備など、又、将来の農業構造についてなど今日の日本の農業問題と比較しながら、じっくり視察してきたいと飛行機に乗り込みました。しかしながら機内でのフライトが遅れた理由、搭乗乗務員不足の言い訳など聞いていると、なるほどフィリピンという国は出発前に聞いていた情報どおりの、いやそれ以上の国なのかも知れない………などと勘繰りながら、色々と思いを巡らせながら機内からの風景を楽しんでいました。やがて、ニノイ・アキノ国際空港に着陸する寸前に見た水害の光景や、河川サイドに建ち並ぶ民家などの風景が目に入った時、又ランウェイの前に民家が在るのが目に映った時に、自分の初志の目標は一体どうなるのかと不安にかられました。しかしながらその気持ちも初めて海外の大地を踏みしめた感激が強く、その不安はかき消え、次第に興味、感心へと心は移りました。

今回の研修で、私にとって、大きなショックであったのはまず、スモーキングマウンテンでありましたし、更に町並みで見る生活状況の実態でありました。そして、次々に隊員の方々から聞かされる、裏側にある目に見えない事実を聞かされた時、身につまされる思いで内心困難状態に陥った程であった。目を追うごとにある程度、マニラにも慣れ、色々を経験していく中で思ったことは、文化的な生活という視点で考えた時、この国は一体どこから手を付けていくべきなのか考えさせられました。同行の人達とも色々議論し合いましたが、そこには教育がまず先だ、いや政治的統制が先だなど様々な意見

が出ましたが、とうてい結論がでる筈はなく、例え出たとしてもそれはあくまでも評論家的でしかありません。そのような国家情勢の下で本気で産業改革と発展のために活躍されている隊員の方々は素晴らしい、又逞しく思えました。そこには家庭の犠牲と協力があつて強い意志と、ご本人の自信あふれる行動は到底私など真似が出来ものではありません。又、国内外の政治的問題にぶつかっていることも聞き、少しながら共感を抱いた者として何が出来ののだろうか。政治への関与などまず不可能であるが、国際情勢の政治的、経済的動向を、今回の経験を生かして、純粋にとらえていくことぐらい出来るのではないかと思います。

そして、その観点から物事を判断し、教育の現場で後進国の実態に絡めた取り組みをすることで事業団活動に参加していきたいと思つているところです。又、農業に関して考えてみますに今日、日本の農業を取り巻く情勢は極めて厳しいですが、まずかかえている問題が違うわけであるから、現実問題としてまず、外国からの支援、援助を促進するのも大切であるが、国民を見つみると貧富の差にいがみ合いがあり、その階級性等からくる閉鎖的な集団を形成している状況は、言葉が合わないかも知れないが国家的支配力で統制する必要もあると思つています。それと同時にその生活ぶりや歴史にふれる中で国民性の大きな違いを感じました。そして、その国民性を十分に生かした形でフィリピンの人々が彼等らしく立ち上がつてゆくのを側面から協力してゆくことが本当の彼らの自立につながるのではないかと思います。その上につつたJICAの活動であれば、もっと効果的で真価が発揮できるのではないだろうか。そして、同時平行的に農業改革が行われていけば、生活レベルの底上げが成されていくと思つています。それらを考えていくなかで、日本がとつている諸方面への支援問題で研修中よく引き合いに出されたのが、中東湾岸戦争に支援した90億ドルという数字です。この数字が研修後ずつしりと重さを感じますとともに、いろいろな角度から見直すことが出来たのも今回の研修の成果と言えらると思つています。

今後、どの様に教育に還元していくのかの点については、“教育はまず家庭から”を基本に置いていますので、帰宅してまず家族に土産話しも兼ねて、生活実態や食料も含めた対する価値観について話して聞かせ、意見を求めました。子供たちも興味本位ながら、フィリピンの状況を初めのうちは信じら

れないふうで聞いていましたが、写真に出てくる住居、スモークマウンテンなどの実状を聞いているうちに、今の自分たちの生活と比較しながら考え初めました。比較しながら物事を純粹に考えることこそ大切なことであり、次に自分が何をすべきかにつながることであるので大きな成果でした。今後は親として、何かにつれ体験したことを忘れずに行動していくことが無言の教育になるのではないかと思っています。

さて、早々に二学期もスタートしましたが、農業高校であるので、今回研修で得た経験を教育の中に取り入れていくことの重要性をとりわけ強く感じています。方法論的にも慎重に生徒の中に入れていかななくてはいけないと思っています。それは生徒自身をまだそのような農業国があるのか、といった安易な方法へ走らせてはいけないと思うからです。先にも述べましたように、フィリピンはまず、農業改革こそ当面最初に手がけなくてはならない事業であると思っていますので、核心にふれる話の導入に苦心しております。

しかし、慎重さの余りぎくしゃくしても仕方ありませんので「私たちにも出来る展望ある協力」と言う寛大な気持ちで授業中の余談実習などを利用しながら、又、日常的な会話の中で楽しく質問を受けながら話しております。何よりも私の狙いは、生徒会活動に於いての取り組みですので何とか大きな組織の中で展開していこうと思っています。とりわけ11月中旬に予定しております文化祭に於いて現在、実行委員会の中で検討しているところであります。私自信の構想としては一つのコーナーをもらって、今回のフィリピン研修と昨年のタイ研修、そして生徒の一人が韓国にホームステイに参加しておりますのでそれをセットにして展示発表の形で生徒、職員、保護者そして地域の方々に見てもらい、後進国の実態を知って頂こうと企画しているところです。研修は期間的には丁度良いのではないのでしょうか、時期的に1日～2日早く出発の方がよいと思われる。研修日程はいいと思いますが、訪問先について余りにも公的機関に集中したのではないか、もう少し関連する泥臭い私的機関も入れた方が、より効果的だと思います。

マニラに於いて、宿舎1カ所から、研修日程の組み方は海外初めての参加者にとっては良かったと、他の先生方とも話していたところです。最後に懇切丁寧な担当の事業団の方々に感謝いたしますとともに、皆様には大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。

氏 名 齊 藤 敦
所属学校 熊本県立熊本商業高等学校
担当教科 英 語

はじめに

国際協力事業団（JICA）のお骨折りにより、平成3年8月21日より8月29日までの9日間、フィリピンへの海外研修の機会を得ました。首都マニラを中心に、JICAの援助を受けている各プロジェクト事業の訪問視察、フィリピン在住の海外協力隊員、専門家の方々との懇談等を通して、貴重な研修ができました。同時に現地での研修だったので、フィリピンの社会、文化、政治、教育、宗教、日常生活などの一部を勉強することができました。実りある研修となるため、終始御尽力いただいた小沢氏、増田氏、現地スタッフの皆様に心から感謝申し上げます。

1. 視察等に関して特に主眼を置いた点

- (1) 援助総額が世界第2位となっている我が国の援助の実態がどのようになされているか？ 相手国の実情をふまえ、効果的に実施されているか？ 一般の人々の中にどれ程度着し、どのように受けとめられているか？
- (2) フィリピンの現在の姿を自分の目で見て、社会、経済、文化、教育事情を学びとる。
- (3) 現地で任務にあたっているJICA関係者、専門家の活動状況や生活ぶりを見聞し、海外援助のあり方の具体的意見を得る。

2. 国際協力の現場で

- (1) 参考になったこと

ア) 現在、フィリピンには日本からの協力隊員69名、専門家90名程派

遣され、現地にとけこみ、あらゆる分野で技術指導をされている場面
を短時間であるが視察できた。単なる外国生活への憧れや、興味
本位の安易な気持では、この仕事には取り組めないことがわかった。
更に、現地のニーズを本当に把握し、全ての状況を頭に入れての活
動や強靱な精神力に敬服した。

- イ) 海外援助が物質的、資金的援助もさることながら、専門家、協力隊
員等の人的な援助が重要であることが理解できた。現地の人々の能
力開発や人材育成に力が注がれている。
- ウ) 国際協力の評価を考える時、日本人の常識、価値判断で捕えるもの
ではなく、相手国の文化、国民性、価値基準を伴うものであるので、
国際協力の困難さを感じた。

(2) 気になったこと

- ア) 各プロジェクトの訪問ができ、専門家の先生方の活動状況は知り得
たが、協力隊員の指導、活動の場を視察する機会がなかった。これ
までに講演等で活動状況や苦勞話を聞く機会があったが、実際の場
面や、現地の人々の対応状況を見たいと思った。
- イ) 日本の最先端の機器、技術等が提供、援助されているが、果たして
被援助国の現状に合ったものか、援助終了後自力で活用できるのか、
メンテナンスはどのようにするのか等を考えれば、無駄な援助に
陥ることもあるのではと懸念した。
- ウ) 各事業がどのように一般の人々に受けとめられているのか、被援助
国の考え方はどのようなものであるのかを知る機会がなかった。各
プロジェクト等で知識や技術を身につけた人々が、どのようにして
社会に還元し、社会に貢献しているのかを知りたいと思った。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきと考えられる協力、プロジェクトについて

今回の研修で、フィリピン畑地灌漑技術開発プロジェクト、労働安全衛生センタープロジェクト、フィリピン貿易研修センター、国立航海技術訓練所プロジェクトのプロジェクト方式の技術協力事業ばかりでなく、フィリピン大学理数科教師訓練所センター、フィリピン科学高等学校、農業試験場、職業訓練所、フィリピン大学セブ校等、幅広く視察することができた。

更には、無償資金協力で行われている初等中学校建設計画で設立された小学校の授業も参観した。

私達が視察した各事業以外にも研修員受入事業、青年招聘事業、開発調査事業、実施促進事業と援助のあり方が多岐にわたっていることを知った。全ての事業がフィリピンにとって大切なものと思える。

日本の途上国への援助については、数々の問題点も指摘されているが、国民の理解、支持を得た援助のあり方になるためにも、理解しやすい広報活動が必要である。

4. 今後の教育指導に活かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

(1) 国際開発教育といえば、視点が欧米に向く傾向は否めない。私達教師の世界観が欧米に偏っていたからと思える。今回の研修、視察で得た反省をふまえ、途上国、特に近隣のアジア諸国に目を向けるような教育実践をしたいと思う。

(2) 今回の研修、視察で得た知識、資料を整理し、高等学校国際教育研究協議会の機関誌に載せたり、研修会で報告したい。

(3) JICAの活動、ODAの意義、協力隊員の活動等について生徒が詳しく知る機会は少ない。多くの資料やパンフレット等を収集、整理して生徒への啓蒙を計りたい。

5. 所感および感想

(1) 研修時期および期間

多くの事情でこの時期の実施になっていると思うが、帰国してすぐに2学期を迎えるし、研修したことの整理・考察をする時間が持てない。8月25日頃に帰国できるような日程が望ましいのではないか。期間は初心者の多い旅行といえるので適当と思える。

(2) 研修日程および訪問先

日程にゆとりがあり、大変良かった。時間に追われずゆっくり視察、研修できた。

単なるプロジェクト、施設訪問だけでなく、フィリピンの風土、歴史、産業、教育、日常生活に触れることができるような訪問が設定されており、大きい意味での研修ができ、有意義であった。

<終りに>

国際協力が重要視される中、実際その現場を視察、研修できる機会を与えていただき、多くのことを勉強できた。日本を離れ、相手国に対して献身的に努力されている方々の姿を拝見し、頭が下がる一方、国際協力の重要性、その難しさも理解できた。国内において、単に口先だけで国際協力を唱えるだけでは進展しないことを改めて痛感した。研修で得た貴重な経験を更に深め、今後の教育活動に生かしていこうと思う。

氏 名 山 内 浩
所属学校 鹿児島県立鹿屋農業高等学校
担当教科 農 業

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

- (1) フィリピンの経済および国民生活の現状
- (2) 政府開発援助（ODA）の成果と課題
- (3) 青年海外協力隊の活動状況と問題点

2. 国際協力の現場で

(1) 参考になったこと

ア) 政府開発援助が、マスコミ等で批判されるような一方的な偏った援助ではなく、フィリピン政府との協議によりあらゆる面を実施されており、援助内容も、建物や機材などの施設設備だけの協力にとどまらず、それらを十分活用し、技術習得のため日本から専門家の派遣、日本への研修員派遣、青年招へい事業などが実施されていること。

イ) 青年海外協力隊員の活動内容がよくわかり、地域にとけ込んで誠意と情熱を持ち、地域から好意的に受け入れられていること。

(2) 気になったこと

ア) 治安が全体的に悪く、訪問した諸施設だけでなくホテルまでピストルを持ったガードマンが警備しており、派遣された専門技術者、青年海外協力隊員、JICA職員の安全性が気になった。

イ) 政府開発援助（ODA）で援助された器具、機材等のメンテナンスをどのように考えているのか。特にプロジェクト終了後、日本人専門家がなくなった時、導入された設備がより有効に利用される

のか。また、研修を受けた人たちがその成果を生かせるような施設設備がフィリピン国内に整い、また整いつつあるのか。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

(1) 畑地灌がい技術開発プロジェクト

フィリピンの農業は、国内総生産の約 1/3 を占め、全輸出量の60%が農産物とその加工品で占められ、労働人口の約50%が農業に従事し、農業生産の中心は米とトウモロコシである。農業全般の発展をめざし、1987年よりこのプロジェクトが始まり、8人の日本人専門家が活動している。これはフィリピンの気候が、雨期と乾期に分かれており、雨期には稲作、乾期にはトウモロコシが主に作付されている。このため乾期の作物を多様化するため水の確保と作物の栽培技術のための圃場研究を行っている。

(2) 労働安全衛生センタープロジェクト

労働安全衛生に関する機関として、労働災害の防止、職業病の予防、労働者の福祉の向上、労働生産性の向上を目的として設置され、安全衛生に関する技術の普及、定着を図るため日本の無償援助でプロジェクトを実施している。

(3) フィリピン大学理数科教育センター

フィリピンでは、理科、数学の教育が不十分で、機材も整っていないため、教師の研修施設として設置され、機材の操作、実験、コンピュータ操作などの研修をしている。ここでは、アセアン諸国からも研修生を受け入れており、視察した時は、バングラデシュの教員の研修が行われていた。

(4) 国立航海訓練所プロジェクト

フィリピンは多数の船員を外国船に供給しており、船舶の安全運航、安全に関する知識や技能の習得のため、このプロジェクトが実施され、

シュミレーションで、港への入港や機関の操作訓練など船員教育を行っている。

(5) 小学校校舎建設

台風で小学校の校舎が壊れるため、日本の援助で台風でも壊れないプレハブ校舎の建設を実施し、訪問したレイテ島のバロ第2小学校では、1棟4クラスの校舎が2棟建設されていた。

(6) 青年海外協力隊員の活動

マニラ、レイテ、セブに派遣されている隊員の方たちと懇談し、現地の人たちと寝食を共にしながら、技術指導や人材育成に活動している具体的なことを聞くことができた。現在69名の隊員があらゆる面で活躍している。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

写真やスライドで生徒にフィリピンの現状、JICAの事業内容や青年海外協力隊の活動状況を授業やクラブ、他に発表の機会があるごとに紹介していく。また、学校新聞、農業機関紙、PTA新聞等に投稿して生徒だけでなく、広く理解してもらおう。

今回、いただいた野菜の種子を播種して同じ品種の日本の野菜と成長や形状などを比較させて、生徒が国際理解を深める材料としたい。

5. 所感および感想

(1) 研修時期および期間

研修時期は、夏休み後半は2学期の準備があるため、できるならば夏休み前半に実施してもらいたい。

(2) 研修日程および訪問先

日程も過密でなく、全体的に良かったです。畑地灌がい技術開発プロ

ジェクトの、試験圃場を天候の関係で視察出来なかったのが残念でした。

(3) その他全般的な所感

今回、参加させていただき、多くのことを学ぶことができた。普通の観光では行くことのない地域や施設を数多く見学することができ、貴重な体験になった。フィリピンで見聞したことを、人生の財産として大切にしたい。国際社会で貢献している日本の技術協力の内容、発展のために尽力されているJICA職員、専門家、青年海外協力隊の様子を知り、大変勉強になり、この貴重な体験をこれからの教育活動に生かしていきたい。

最後に、このような研修を企画された国際協力事業団、同行してお世話していただいた小沢氏、現地で案内して下さった増田氏に対し、深く感謝致します。

(2) マレーシア・シンガポール班日程

年月日	日 程		宿泊(ホテル名等)
	午 前	午 後	
08. 21 (水)		15:50 クアラ・ Lumpur 到着 (JL721)	EQUATORIAL HOTEL
08. 22 (木)	10:00 事業概要説明 (JICA事務所)	13:45 ファインセラミック研究プロジェクト見学	同 上
08. 23 (金)	9:40 農科大学バイオテクノロジー学科拡充計画見学	市内見学	同 上
08. 24 (土)	9:00 マラッカ見学	マラッカ見学	同 上
08. 25 (日)	8:05 クアラ・ Lumpur 発 (MH630)	12:05 コタ・キナバル到着 (MH630) 14:30 市内見学	ハイヤット・キナバル
08. 26 (月)	9:30 サバ州造林技術開発訓練計画プロジェクト見学	12:00 サビ島ツアー	同 上
08. 27 (火)	自由行動	15:20 シンガポール到着 (MH631)	カールトン・ホテル
08. 28 (水)	10:00 日本・シンガポール AI (人口知能) センター 見学	13:30 市内見学 22:20 シンガポール発 (JL710)	同 上
08. 29 (木)		6:05 東京着	

氏 名 武 田 雅 道

所属学校 宮城県私立東北学院榴ヶ岡高等学校

担当教科 社会科(日本史)

1. 社会科教師として、技術的な問題よりもむしろ“アジアの中の日本”ということはどう考えるかに主眼をおいて今回の研修に参加した。1つ1つの技術協力がどんなものかも勿論知らなくてはいけないが、「なぜ援助するのか?」「援助国に、どんな影響を与えているのか?」を探っていくことが、国際教育導入に必要なのではないかと考えてきた。その為には、協力の現状を知らないでは済まされないし、成果を確認しなければ、国際理解教育は出来ないであろうと考え視察に参加した。
2. (1) 熱帯雨林の問題が国内で取り上げられているときだったので、社会科を教える立場から、実情を知りたいと思っていた。サバの造林計画などは、大変役にたった。
(2) 我々教育の立場でもいえるが、ただ技術を教えるだけでなく、何故そうなるのかを考えさせていく必要があるのではないかと感じた。やはり、教育の充実も同時に行わなければ無理があると感じた。
3. JICA が携わっている協力・プロジェクト等は、すべて紹介するべきだと思う。何故、何の為に、の説明に、もっとお金をかけてもよいのではないかと感じる。素晴らしい仕事をしているのだから。
4. 熱帯雨林の問題などは、L. H. R. 等で、生徒に考えさせることは必要だと思っている。社会科の教科指導のなかで、マスコミの記事を如何に公平に批判できるか、という批判力の養成というのもあるため、題材として大いに生かしたいと思っている。
5. (1) 時期的には、2学期がすでに始まってから帰国するため、非常に困った。改善してほしい。
(2) 関西や関東だけを基準にしては、意味が無いのではないかと。

- (2) 観光とは一線を分けた日程で、とても満足している。
- (3) いろいろな想いがあるが、まだ頭の中で整理できていない為、整理できた段階でお知らせしたいと思います。

氏 名 佐 藤 千 姫 子
所属学校 秋田県立十和田高等学校
担当教科 英語

(ア) 視察において主眼をおいたところ

以前、フィリピン(マニラ)、中国(上海・杭州・桂林・広州)、台湾(台北・花蓮)を旅して、人々の活気があり、産業や文化の面で感心するところも多く、確実に力をつけていると思われた。マレーシア・シンガポールについて、アジアでは優等生の国と言う人のいる一方、日本以外のアジア諸国を低開発国とみなす日本人の多い現在、自分の目と自分の肌で人々の様子を知ること。次に、日本の経済援助や技術協力を両国はどのように受け取っているのかを内側から知ること。三つ目に、グローバルな生態系が問題にされている今日、少しでも自然と人々との関わりを知ること。最後に、人々の生活とその背景にある文化や歴史をできるだけ感じ取ること。

(イ) 9日間の旅の概要・体験談およびプロジェクト視察後の所感

〔8月21日〕首都クアラルンプール到着。空港の外で、居並ぶイスラム教徒らしき人、インド人らしき人、高々と葉を茂らす常緑樹を見て「外国」に降り立ったのだと実感する。ホテルまでの間に見たヤシの木の多いこと。北緯1度から6度のマレーシア。

〔8月22日〕JICA事務所を訪れる。詳細な資料が配布されマレーシアにおける経済協力の実態、事業内容についての説明を聞く。後で、「国際協力の歴史資料」を見て、最近マスコミで話題になったODAは昭和47年にGNPの0.7%目標を受け入れ、昭和52年の夏、私がマニラに着いた日、東南アジア6カ国訪問で福田首相を妹の勤める日本人学校の子どもたちと出迎えた時、ODA5年倍増を意図表明したことを知る。日本国内での一部の批判的な声は、今回のプロジェクトを視察して有効かつ円滑に行われていると実感でき私の中で小さくなる。

昼食予定のシャーラム近くのモスクは、白と青の磁器のようなすべすべ

した外観、南国の光を受けてすっきりと建つ幾何学的な姿、形でそれは美しい景観だった。そしてこの国のイスラム教徒の信仰の深さを知らされる思いだった。昼食をとっている私たちの耳へもコーランの響きは続いていた。マレーシア農科大学を訪れたときも学生はキャンパス内のモスクへ三々五々向っていた。最も古いモスク、マスジット・ジャメでも観光客の目をよそに人々は祈りを続けていた。コタキナバルのモスクでは、はだしの男の子が紙飛行機を飛ばした後、すたすたと事もなげにモスクの中に入って行った姿が浮かぶ。国民がマレー人、中国人、インド人、そしてサバ州に渡ると、フィリピン人、インドネシア人、種々の民族のいるマレーシアではイスラム教に限らずキリスト教、仏教、ヒンズー教など人々の心の支えになる宗教は必要かつ大切な存在にちがいない。生活の奥深く根づいている。

午後、SIRIM(マレーシア標準工業研究所)を訪問。「日本・アセアン科学技術協力、マレーシアファインセラミックス研究プロジェクト」を視察。インド人女性所長が早口の英語で熱っぽく説明してくれたが、よく聞き取れないところがあった。英語教師としてもっとリスニングの力をつけなければと反省。堂々とした彼女を見て、最近でこそ日本でも女性の地位向上が叫ばれているが、この国では平然とやっつけているのではないかと。

研究所の中には高性能の機器・機械・計器が日本から導入され、日本人の専門家と現地の研究者がチームを組んで協力し地道に研究に取り組んでいる。数ある機器の中で、実際に観察できた、ガラスの硬度を計る機器が最も印象に残っている。

〔8月23日〕スランゴール州のセルダンにあるUPM(マレーシア農科大学)を訪れ、食品科学及びバイオテクノロジー学部の「バイオテクノロジー学科拡充計画」を視察する。学部長はイギリス人女性で、バイオの基礎研究やJICAから導入された機器をひとつひとつ案内し説明する。日本には見ることのできない電子顕微鏡の前では不思議な思いだった。バイオのしくみを壁にかかった発砲スチロールの模型を指さしながら、植物の細胞に微生物が入り込んで変異が生じ新しい品種が生まれる過程を熱心に話してくれる。階段の窓ガラス越しに見えるきゅうりなどの水耕栽培についても細かに説明。彼女の瞳の輝きから察してこのプロジェクトも着実に進展していくだろうし、またそう願いたい。別れ際、彼女は私に手紙をくれるように言う。

2千ヘクタールの敷地は広すぎて移動は車、私たちはバス、学生はバイクだ。3年がかりで成功にこぎつけたというハゼの養殖場を見学し、ヤシ・コーヒー・果樹・ゴムなどの農園をひとつずつ見る。何というスケールの大きさ。ヤシの木の幹の節くれだったこぶこぶは太陽光線をふんだんに吸収した生命力の現われのようだ。すんなりしたゴムの木の樹液の採取も日本人の専門の先生が説明してくれる。その昔、パミール高原からインド人はゴム園の労働者としてマレーシアにやって来たことも。日本の専門家の方々の現地での研究生活も大変だと思われるが、日本とマレーシアの文化交流の礎になっていくことだろう。

大学を後に、マレーシアの特産品、ピューター（錫97%、アンチモン・銅の合金）工場を見学。女性労働者がほとんどで根気と技術のいる仕事に見えた。隣接しているみやげもの店で小さな花びんを買う。

夜はヤズミンで民族舞踏ショーを見る。民族楽器にも興味を覚えた。

〔8月24日〕マラッカへの小旅行。道端で男の子がランブータンを売っている。バスで2時間ほどで到着。漁民の守護神を祭るマレーシア最古の中国寺院へ。日本のお盆をやっていて供物が山積みだった。オランダ広場。プロテスタント教会の中の厳肅さ、黒光りするいす、調度品にも見とれてしまう。次にセント・ポール教会へ。歴史の傷が伝わってくる。16世紀初め、造られたというポルトガル人の要塞（サンチャゴ砦）に入る。赤茶けた石の壁をくぐり丘の上に出ると、この地で晩年を過ごしたフランシスコ・ザビエル像が立っている。近くの壁の前で若者が二人、ギターを弾いている。かつて、ポルトガルとオランダの間で闘争・戦闘がくり広げられただろう。砦を出た時、はっと目を引くほどきれいな黄色い蘭が咲いていた。前日も独立記念碑のあるレークガーデン内でピンクや赤の南国の花が見事だった。マラッカまでの道路には赤紫色のブーゲンビリアが植えられている。マレーシアでは最も古い町マラッカにはどこか西洋と東洋の空気が混然と溶け合って、素朴に息づいているという感じがする。

〔8月25日〕クアラルンプールから4時間の飛行で、ボルネオ島、サバ州コタキナバルに到着。南シナ海が展望できる。時の流れがゆっくりしている。サバ州庁舎はそこだけが現代建築のシンボルのように建っている。サバ博物館の中で、リバ・パシル（帆船）を見てはるか昔からフィリピン人やインド

ネシア人との交流が盛んだっただのを知る。夕方、青空市場でペールをかぶった女の子からインドネシア産のドレスをねぎって買った後、少々心が重かった。義務教育制度のないこの国で、この子は学校へ行かずじまいだろう。マレーシアでは初等教育に力を入れ、3Rカリキュラム(Reading, Writing, Arithmetic)読み、書き、計算を重視して、就学率も高いようだが。お昼ごろ、スクールバスを見かけたが、小学校は二部制をとっているところもあるらしく午後からの学校へ行く子もいるのだ。教育は国づくりの第一歩である。多民族国家にはいろいろ問題点も多いと察せられる。

〔8月26日〕「サバ州造林技術開発プロジェクト」を視察。SAFODA(サバ州林業開発公社)とJICAの協力で、育苗・造林・森林管理と大変な事業に取り組んでいる。赤土の肌もあらわな林道をバスで登って、アカシアマンギツムの造林地に着く。日射しはまさに赤道直下という感じでみな汗だく。足元に、今、日本で静かなブームをよんでいるという食虫植物、ウツボカズラが自生している様子をJICAの方に教えてもらう。胴体と羽、足がばらばらになった昆虫を見た時、生きた自然が存在していると思った。アカシアマンギツムは成長も早く、いずれ木材として商品化される時が来るだろう。造林は自然との共存、土壌にあった品種の研究、林道建設など人の知恵と資力が必要とされる分野と思う。

午後、モーターボートでサピ島へ渡る。さんご礁のライトブルーの海はないでいて、常緑樹の木立に水色のちょうが飛んでいる。小鳥の声。海水はやわらかでフェイスマスク越しに見た黒い熱帯魚は人なつっこい。泳ぎのできる人たちは、深い所で、感激するほど美しい魚と対面できる。おとぎ話の竜宮城は、もしかしたらサピ島のような所だったのでと。日本人観光客が大勢来て、夢のような島を汚すことのないようにと願わずにられない。ブルネイから来たというイギリス人親子と会話しながら、この人たちの海をいとおしむような視線を感じたとき、地球の自然をやさしく見つめていく姿勢をみんなが持てたらと思う。この努力はしていきたいものだ。

〔8月27日〕通訳のシルズさんのサバの歌を聞いているうちに空港に着く。シンガポールへ飛ぶ。夜、ロンジャンで四川料理を食べながらJICA事務所の方々、技術協力で日本から来ている専門家の方々と会食。外国での貴重な体験談を伺った。マレーシアでも青年海外協力隊員の方々とも会食の席でお

話はできた。いろいろな国で暮した方々の話から日本を客観的に見る眼を養うことと日本にしか通用しない常識もあることに気づくことを教えられた。〔8月28日〕日本・シンガポール(AI(人口知能)センターへ。清潔でモダンなビルはシンガポール政府が建て、AI—私には高性能のコンピューターと考えられた—は日本側から導入。副所長の中国人男性が英語で説明。日本の技術水準の高さをここで知る。研修講座も開かれビジネスの面でも技術移転が行われている。実際AIを使った医療プログラムは大したものだと感心してしまう。

午後は市内見学。博物館では歴史の映画を見る。元気のよい小学生といっしょに。ガラスケースのシンガポールの歴史的な事件の中に日本軍のつめ跡が残っている。アラブ人街には巧みな日本語を話すインド人の商人がいた。地の利を生かした港町シンガポールは商業都市というイメージが私には強い。すきのない人工的な美しさを持つ都市(国)よりもどこか自然でゆとりを残した都市であってほしい。

〔8月29日〕朝成田着。無事帰国。リムジンバス・新幹線・ローカル列車と乗り継ぎながら9日間の旅をふり返る。色づいた稲穂、緑の山々は気持ちをなごませてくれる。

多民族国家であっても東洋的調和があり、民族の熱気が感じられたマレーシア・シンガポール。この旅を通して、いろいろな人との出会いがあり、心のつながりができたことが何よりの収穫に思える。大切にしていきたい。

(ウ) 教育現場での体験発表

授業に行くクラスには写真や資料を見せながら体験を話す。

9月4日から6日まで、県の教育センターで中・高英語教師26名、AET3名、指導主事による「イングリッシュ・マスター」の講習に参加し、周囲の先生方に研修旅行の話をし、非常に関心をよんだ。特にAETのエリックさん(センター所属)が講義・演習の中でマレーシアを話題にし興味をもってくれた。プロジェクトの話も彼におしえた。

9月7日、本校の女子職員に私が英語で話し商業科の先生が通訳、地理の先生からかりたアジアの地図を掛けて、写真・資料もあったので反響は大き

かった。

本県の高校生・留学生を集めて国教協の宿泊研修が秋田市で10月8日、9日開かれるが、「マレーシア・シンガポール9日間の旅」と題して50分の講演予定である。本校の「研究紀要」に研修報告をまとめ載せていただく。

(エ) 最後に

高校教師海外研修派遣という事業を実施して下さる国際協力事業団に対して心から感謝したい。私個人は、期間・訪問先ともに満足しているし、かけがえない研修をさせていただいたと思っている。英語教師としての課題も見出すこともでき、新たな気持で教壇に立ちたい。

研修期間中、細やかにお世話下さった同行の前川さん、ほんとうにありがとう。

氏 名 河 野 秀 二

所属学校 千葉県立成田園芸高等学校

担当教科 農業

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

- (1) 国際協力事業団（JICA）の開発途上国への経済・技術援助の現状、また現地においての人造り政策が国民的感情の上でどう息づいているのか。ある農業雑誌の中で「命の森を奪わないで」というタイトルで、東マレーシアのサラワク州での商業目的の熱帯雨林乱伐による環境破壊が問題になっていた。今では、森林の約30%が失われ、先祖代々行われてきた焼畑農業ができなくなり、川は汚れ、森の恵みに依存してきた先住民は、貧困とさまざまな病気に苦しめられている。そのサラワク材の5割を日本が輸入し、一方では造林技術の開発プロジェクトがJICAによって進められてきている。

技術援助がどのように現地の人々に受け取られ、活かされているのかを理解する。

- (2) 海外協力隊員との懇談会の中で活動状況、生活の現状、苦勞などを聞くことによって少しでも理解を深める。
- (3) マレーシア、シンガポールの文化、習慣の違いを自分の目で見、実際に肌で感じ取ること。

2. 視察研修の中で

- (1) クアラルンプール空港からホテルまで

約一時間遅れて、クアラルンプール（以下「KL」とする）空港に到着する。

上空からは、見渡す限り油椰子（Palm Oil）のプランテーションと、その中に点在する赤茶けたトタン屋根、ようやくこれから研修が始まるという感を強くする。

ホテルに向かう途中、まず目についたことは日本製の車が非常に多いこ

とである。特に、ホンダ、三菱が多いように感じた。ガイドの説明によると車は高価なもので、日本製で250万から400万円、田舎の家が1件買えるとのことである。それにも拘らず、交通量が非常に多く町の活気が伝わってくる。

KL市内は緑が多く、ふんだんな緑地帯の間を縫って、道路が走り緑地環境に随分気を使っているのがわかる。しかし、車検がなく、排ガス規制もないのでバイクを運転している者は、シャツの汚れを防ぐため、背広を裏返しに着ている者がほとんどである。これからまだまだ環境問題に力を入れなければならないという感じを強く受ける。約1時間後ホテルに到着する。

(2) JICA マレーシア事務所にて

事務所にて、マレーシアに対するJICAの協力概況の説明を受ける。

わが国のマレーシアに対する技術協力は、毎年順調に伸びており、これからは量の援助を止め、質の援助を高めるようにする。それには、受け継ぐマレー人の姿勢が問題になってくる。今現在、50名の専門家を派遣しているが、特に日本語教育、大気汚染管理、建設関係に力を入れているがそれぞれ問題を有している。

日本語教育では、日本語を学ぼうとする人が増え、教える側が足りない状況にある。また、教え方についてもこれから検討しなければならない。大気汚染管理については、KL市内の2.5人に1人は車を保有し、車の台数が増えている中、自動車の排ガス規制がないので環境問題になってきている。

建設関係では、マレーシアの人口1700万人、国土は日本の0.9倍、今まで人口の少ないことがメリットであったが、工業化が進むにつれ労働力が少なくなり、フィリピン、インドネシアなどの外国人労働者に頼っている。それに伴い管理できる熟練労働者が少なく、人材育成をどうするかが今後の課題になっている。

JICAでは、これらの問題を調査し、レポートにするのが仕事であり、改編策を実行するかどうかは政府の判断である。今まで、7割近く採用されたと聞き、マレーシアにおけるJICAの重要性を痛感した。

民間企業の国際協力では、天然ゴムの廃液が公害の原因となり政府が頭を抱えていたが、横浜ゴムが廃液を肥料に変える研究をし、実際売り出している。しかし、まだまだコストが高く採算ベースにのらない。これから更に研究が進みコストが下がれば爆発的人気になるのは確実である。日本企業の開発協力が、2020年マレーシアが先進国に入ることへの投資となり、国全体がそれに向けて動こうとしているが、いろいろな障害があるように思える。

(3) JICAの人たちとの懇談会にて

この様な懇談会の中から、現場で働く「生の声」を聞くことができ、非常に良い思い出となった。マレーシア政府のプミプトラ政策（マレー人優遇政策）にもかかわらず、経済的実力を握っている中国人のたくましさを感じる。マレーシアは、人種差別の中からできている国で、マレー人と中国人はあらゆる面で違っている。銀行から金を借りる場合、マレー人はほとんど無利子、大学進学の際においても優遇される。そういうコンプレックスが中国人を強くし、この国の経済力を握るようになったとのこと。

そういえば市内観光の際、バスの中からKLのChina Townを見ることができた。そんなに広い範囲ではないが、屋台のにぎやかさと熱気に圧倒された。狭くてゴミゴミした感じがいかにもChina Townの風情のように思われた。

KLに暮らしてみても、治安もしっかりしていて生活するには非常にいい町であるとのこと。車は高いがガソリン代は半分、物価も安い、食事は2ドルから5ドル（100円から250円）ぐらいで屋台からとることができるという。

話をしていくうち引き込まれていき、短期間ならここで生活してみたいという気になってくる。

(4) マレーシア農科大学にて

まず、キャンパス内に入って感じるのがそのとてつもない広さだ。大学の敷地面積が約2000 ha、事務職員が1000人もいるとのことだ。何処を

どう歩いて行けばいいのかわからないし、また一人では歩けそうもない。大学を案内してくれた職員でさえ道を間違えたぐらいだ。広大な自然に覆われた公園に来たような感じである。学生のほとんどがバイクで移動しており、学内の道路もきちんと整備されている。大学内の学生は、夏休みだというのに忙しそうに動き回っている姿が見られる。

ブミブドラ政策のため、多くの学生はマレー系マレーシア人のようだ。驚いたことに、大学キャンパス内に大きなモスク（イスラム回教寺院）が建てられており、時間になると男子学生は祈りを捧げに来る。

JICAでは、1986年1月に設立されたバイオテクノロジー学科の充実、整備及び人材育成を図ることを目的とし、専門家派遣、機材供与、研修員の受け入れを組み合わせたプロジェクト方式技術協力をしている。

政府もバイオに力を入れるという政策で、学部内は日本より高い機材、設備が整っているかもしれないとの関係者の説明がある。学部内のいろいろな設備を見て回り説明を受ける。専門外なのであまり理解できなかったが、学生の真剣な授業風景が印象的であった。

その後、果樹園を案内してもらいマンゴ、ドリアン、グァバ、ランブータン、ジャックフルーツ、コーヒー、パームオイル、ゴムの木等の見学をする。どれも広大な敷地に栽培しているので管理の大変さを感じた。水産学部では、はぜの養殖研究のため派遣された専門家の説明を受ける。マレーシアでは、はぜは高級魚であり、今年初めてふ化に成功したとのこと。今では、エサの養殖に困難をきたしているようだ。千葉県富津で、はぜ釣りの経験があるが、それとは比べものにならないくらい大きなものであった。

(5) コタ・キナバルに着いて

KL空港から約4時間後、コタ・キナバル（以下「KK」とする）空港に到着する。

空港に降りてまず感じたことは、KLの作った緑でなく、自然の緑の豊富さである。

バスでホテルに向かう。海岸地域では非常に産業開発が進んでいて、バスから見た感じ「新しい町だな」という印象を強く受ける。この町は、

第二次世界大戦中日本軍の占領下であり、空爆等で全てが戦後に再建されたものだと、ガイドの説明を受け心苦しい思いをする。

東マレーシアは、ボルネオ島の北に位置し、サラワク、サバ州の2州からなる。研修ではサバ州の造林技術開発を見学する予定になっている。サバ州の人口は160万人、そのうちの50万人がフィリピン、インドネシアの出稼ぎ労働者であることを聞き驚く。州面積は北海道よりやや小さいとのこと。

1時間10分後ホテルに到着、さっそく Jalan Jalan (散歩)。

ホテルからさほど遠くない市場の方へ足を運ぶ。市場からはみ出して、大通りの向い側ぎっしりに並ぶ露店。一歩建物の中に入ると、干し物や香料、果物、雑貨などの売店がぎっしりで、強烈な香りがつぎつぎと鼻をつく。通路は狭く、通り抜けるのがやっとなのである。市場の裏側へ行くと異臭がひどく、その中でフィリピンの子供たちが観光客相手にたばこを売っていた。表の人々の活気とはぜんぜん違うものを感じる。

(6) サバ州造林技術開発訓練計画を見学して

ホテルを出発して、約1時間後キナトゥール村(KKより約30km)に到着する。到着後、日本側チームリーダーの村井さんより、このプロジェクトの説明がある。

サバ州は、わが国に対する南洋材の重要な供給地であり、州財政の5割以上を木材輸出、及び関連産業に依存している。近年、商業的伐採や大規模農園造成、過度の焼き畑移動耕作などにより、森林資源は急速に減少劣化し、環境問題になっている。

州政府は、農業放棄地、伐採跡地などを対象にして、アカシアマンギューム等の早成樹種の造林開発をし、森林資源維持増強を進めてきた。更に事業の推進のためには、中堅技術者の養成と造林技術の開発改良が急務であるとして、わが国に技術協力の要請があり、JICAがこのプロジェクトに1987年より参加した。

KKの南に位置し、州道、鉄道、湿地に囲まれたゴム園の跡地で区域面積は約500ha。年降水量は2600mm、5月から11月が多く、2月から3月は100mm未満、苗木を雨期に植栽し、その際雨が降らなければ枯れて

しまうこともある。

土壌は、赤茶けた土（アカリソル）でマレーシア全土がこの様な土である。温度が高いため枯葉等の分解が早く、腐食土は表土の5cmぐらいで非常に痩せている。実際、現地を歩いてみて食性植物をよく見ることができ、土壌の痩せていることがわかった。表面は堅く、雨が降っても2cm以下は浸透しにくい、樹木の成長は日本の3倍のスピードで成長するというのを聞き驚かされた。

バスで現地へ案内されたが、今走っているこの林道を作るのにどれだけの時間がかかったのか、思わずにはいられない。広い敷地に等間隔に植栽されているアカシアマンギュームの試験地を見て、このプロジェクトの規模の大きさに感心した。

(7) 海外協力隊員との懇談会にて

KKからバスで5時間ぐらいの村で、農村開発をしているSさんと話をすることができた。

協力隊員の活動状況、苦勞など「生の声」を聞くことができ、本当に感動した。

村全体のレベルが低く、都市との格差が激しい、村人たちは、その日を暮らせばいいという考えで、ガムジャラに何かをやるということがない。また、やらなくてもここでは生きていけるとのこと。「腹がすけば天から食料（椰子の実）が降って来るよ。ただ、それを頭で受けたらおしまいだがね。」と笑いながら話していた。Sさんたちがやっているのは、一種の「村おこし」でいろんな生活技術を教えることができるが、なかなか村人たちに理解されない。本当にこの村では、協力隊を必要としているのか矛盾を感じることが多い。最近では日本的な見方、日本的な考え方を捨て彼らとつきあうことにしているとのこと。

村に入って早く村人の中にとけ込もうとし、生活を共にしてきたが、食生活の違いに戸惑うことが多かった。水なども雨水を貯留して飲んでいるが、下痢と風土病に悩まされ、2ヶ月目に手足の爪がづきづきと剥がれ、何回日本に帰ろうと思ったかわからないとのこと。今では笑って話しているが当時は本当に悩んだことだと思う。

あと、7ヶ月で期間が終わり、帰国するとのこと。本当にご苦労さまです。これからも頑張ってください。

(8) シンガポールに着いて

シンガポール空港からバスに乗り、ホテルまでの間、窓から見えるのは、林立する高層ビル、整備された公園・道路、何処となく日本に似ていて他国に来たという感じは受けない。

ただ、町を歩いていて、道路にゴミが落ちてないとか、違法駐車のないというのは、随分日本とは違うようだ。

シンガポールでは、第一次産品はほとんどマレーシアから輸入している。水もマレーシアから輸入し、浄化したものを逆にマレーシアに輸出している。水に気を使わずにすむというのは研修にきて初めてである。

国土が狭い(淡路島とほぼ同じ)ためか、自動車の台数をかなり制御している。車はかなり高価なもので、200%の税金と車を買う権利を100万円で買わなければならない。それに伴い駐車場の完備についてもきびしくやっている。

人口は約250万人、一番多いのが中国系の75%、マレー系が15%、そのほか10%である。民族が雑多なのに伴って、生活習慣、宗教もさまざま。その中で経済の実権を握っているのが中国系で、教育についても非常に熱心である。

3. おわりに

『新・東洋事情』という本の中で、「日本人の持つマレーシアの平均的イメージは、椰子の木の葉で造った粗末な家で寝ている発展途上国」という文があった。自分も研修前は、これに近いイメージを持っていたが、首都クアラルンプールに足を踏み入れた途端、今までのイメージが崩れ去った。

今後は、新しい視点から東南アジアを見ることができそうだ。

JICAの事業内容を視察し、それぞれの国において経済・技術の援助だけでなく、「人作り」の重要性と、日本企業のマレーシア進出が環境破壊だけでなく、国際協力という側面もあることを知ることができた。

海外協力隊員の現場で働く「生の声」聞き、新たにその重要性について、理解を深めることができた。

これら研修で体験したことを、11月の文化祭で発表したいと思っています。最後に、このような研修の機会を与えて下さったJICAの皆様に大変感謝しております。

研修期間中面倒を見て下さったJICAの前川さんと阪口先生には、大変お世話になりました。前川さんを見ていて英語を話せることのすばらしさを知りました。これから英語の勉強を少しずつ始めたいと思っています。

氏 名 上 治 正 美
所属学校 神奈川県立相原高等学校
担当教科 農業（造園）

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

自分の専門が造園であるため、訪問先の都市環境（特に公園緑地施設）について視察したいと考えていた。また発展途上国における公園緑地行政のあり方についても興味があった。都市環境問題、その中でも特に公園緑地に関する事は道路、上下水道、建物、その他必要な生活施設が整備された後に行われることが多い。ある意味では、プラスαの事業と考えられている。したがって我が国においても先進都市ではこれらの事業の実施が目につくがその他の都市ではほとんど見られない。

マレーシアでは、クアラ・ルンプールとコタキナバルの2市を訪れた。両市とも街路樹を初めとした緑が多く、道路に附随した緑地もかなり広く、良く整備されていた。また、記念事業的な広場も多く都市面積に対する緑地の占める割合もかなり高いように思われる。シンガポールでも市内の緑地施設は大変多く、良く整備・管理されていた。

公園緑地行政については残念ながら聞く機会がなかったが、各都市とも良く整備され、管理されていた。これは、それなりの行政指導がなされていると考えて良いのではないだろうか。

2. 国際協力の現場で

(1) 参考になったこと。

現地の人達（研究員）の真剣な取組みを見て、協力の大切さを改めて知った。

(2) 気になったこと。

ある協力隊員から「ある民族の人達は、物事に対して発展的な考え方やそれに対する努力が少なく、ある程度以上になるとあきらめてやろうとしない。」という話を聞いた。この話を聞き私は、人としての教育の大

切さを感じた。民族のいろいろな問題もあると思うが、我々は小さい頃より努力し、少しでも良くしていこうとする考えを持っている。しかしこれも日本人的思考方なのか？ したがってプロジェクトの期間内あるいは協力隊員のいる間はそれなりの結果があるが、これらが引上げてしまふと機能しなくなることがあると聞く。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

今回視察したマレーシア・サバ州の造林技術開発訓練計画は、現在世界的問題となっている熱帯林破壊（特にサラワク州）に対して、我が国の立場をある程度理解してもらえるプロジェクトではないだろうか。熱帯林破壊に対するアフターケアの在り方としてもっとアピールして良いプロジェクトであるとする。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策あるいは材料として考えていること

科目「造園計画」において訪問都市の緑地施設の状況を撮影したスライドを利用して指導したい。また特に、今回視察したサバ州の造林技術開発訓練計画は環境の保護・造成についての資料としたい。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

特になし

(2) 研修日程および訪問先

日程については、ひとつのプロジェクトの見学時間が短く感じた。場所によってはもう少しゆっくりしても良かったように思う。

訪問先については、いろいろな方面があり良かったと思う。

(3) その他全般的な所感

まずはじめに、このような研修の機会を与えていただいた国際協力事業団・全国国際事務局・神奈川県国際教務局に感謝申し上げます。

私は、今回の研修で初めて外国へ行った。そして、あらためて英会話の必要性を感じた。買物に行く、自分の考えが伝わらない。食事に行く、細かく聞けず注文してしまう。タクシーに乗る、行先を告げあとは無言。等々……。県の国際教の行事の中に、外国人留学生と交流することが年に何度かある。その時でも英会話の必要性を感じたことはなかった。日本で普通の生活をしている以上、英語を話す必要はない。しかし、今回日本を出てみて痛切に感じた。タクシーに乗って運転手と話ができなかったあの悔しさ・あの寂しさ。これを機会に私自身の国際化へ向けて努力したい。

氏 名 近 藤 静 雄
所属学校 山梨県立農林高等学校
担当教科 農業（農業土木）

〔1〕 視察等に際して特に主眼をおいた点

地球環境汚染の原因となる途上国での公害、砂漠化、オゾン層の破壊、……等その問題は多岐にわたりますが、環境汚染問題の中でも重要な問題のひとつが、地球温暖化問題であると考えられますがそれが何故起きるのかをこの目で確認したかったものです。

日本における情報として、かつては大密林だったが、過度の焼き畑移動耕作で丸裸になったり、商業的伐採や大規模農場造成などによる森林資源の急速な減少劣化の現地を視察し、どのような対策が推進されているのかを知ると同時に国際協力事業団の方々や海外青年協力隊員の苦勞に接して感謝したいと念願していたものです。

第2として途上国の食料問題についてどのような実情であるか、人口増加と食料問題をどのようにとらえるか、日本の食料自給率と海外依存率、食料供給の大半を輸入に頼っているだけに世界的な農業生産に影響が生じたら、当然日本の台所にも響いてくると思う。

世界市場の農業を通しての乱れは深刻な問題であると思うし、漁業や畜産業などへの影響も懸念される。

途上国における工業と農業の並進についてどのような対策がなされているかも知りたいと思ったからです。1850年代のイギリスの二の舞である国際分業論を繰り返してはならないと思ったからです。

第3にアジアの日本に対する国民感情を肌で接してみることでした。第二次世界大戦後半世紀を過ぎて経済大国日本に対する複雑な感情、ODA等を主とする経済協力についてアジアの国々はどのようにとらえているだろうか。経済協力が的確であるかどうか、それと同時に国全体の意欲はどうだろうかなど主眼にすることに心掛けた。

〔2〕 国際協力の現場で参考や気になったこと

国際協力事業団の職員・海外青年協力隊員の方々が現地人と本当に仲良くやっていたことが印象に残った。海外研修の私達にも本当に親切にしてくれたことにまずお礼を申し上げます。民族・宗教など生活様式や習慣の異なる人種が一国を構成する中で、ひたむきに地味な活動に単身赴任で献身している姿には頭が下がります。

車の中でガイドの説明『あそこでゴルフをしているのは皆日本人』との言葉に経済大国日本を実感した。対日感情が悪くならなければと思った。入国手続きに手間どったことや日本車が多く、日本商社の看板が都市には多くびっくりした。必要以上の日本企業の宣伝はどうかと思った。宗教寺院が多くテレビでも朝は放送を通じて宗教教育を実施していたことが強く印象に残る。物価安は予想通りでした。

日本の新聞がその日のうちにコピーされてあったのには国際的な情報化の流れに驚く。新聞やテレビの形式にも日本のようなチラシでなくニュースはニュース、ショッピングはショッピングというように大項目ごとに掲載されていて非常にみやすかった。

国際協力・協調・理解というものは、その国の上層部のみではなく一般の農民・庶民に直接・間接に還元されなければならないと思った。

どの国でも都市集中で一步郊外に出ると貧しい生活が見られた。都市に人口が集中して地方の生活環境はあまりよくないことに気がつきました。

日本においても過疎化が進み人口の一極集中がありますが、これを少しでもなくすためには地方都市なり、農村なり、過疎地帯を住みよい環境として地域開発に拠点とするような海外援助であって欲しいと思いました。

〔3〕 我が国の協力を紹介すべき協力プロジェクト等

都市集中でなく地方の開発・過疎化をなくすための援助、ダム開発、農村の機械化等。

〔4〕 教育指導に生かす具体的方策

アジア各国の明治維新的な意気込みやルックイースト政策による国力の増強を伝え、アジア諸国の工業化によってどのような共存共栄を日本としてなし得るか。世界的立場にたつて我が国の将来を考えたい。

人口問題・労働力問題・資源・技術力・環境問題……等を今回の見聞をもとに研修報告・スライド・授業の中で実施する方針です。

〔5〕 所感および意見

(1) 研修時期および期間

現状でよいと思います。

(2) 研修日程および訪問先

日程が多忙です。もう少しゆとりをもたせて下さい。現地の人や青年協力隊員との交流は懇談会を夕食時だけでなく一つの部屋で時間をかけて下さい。一人ひとりが簡単に状況を知らせる場が欲しいです。

訪問先はオーストラリア・インドネシアも含めて下さい。

(3) 全般的所感

シンガポールはもとより、マレーシア(東・西)とも『ルックイースト』のもと目覚ましい発展を示している。

日本の経済援助もその富を一部に集中することなく国際協調・協力・理解をはじめ日本の技術協力や援助が各国々の末端まで浸透してアジアの共存共栄に役立って欲しいと同時に世界平和に協力する国際協力事業団と海外青年協力隊員の活動に感謝し、我々日本人によるより高度な農業・工業技術の興隆を願うものです。

氏 名 渡 辺 緑 郎
所属学校 岐阜県立加茂高等学校
担当教科 音楽

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

自然保護

2. 国際協力の現場で

(1) 参考になったこと

〔植林のむずかしさ〕

サバ州の山林は土地が豊かだと思っていたが、暑さで枯れ葉や草木が堆肥にならず、また肥料を施しても雨で流されてしまう。

植林といってもマレーシアの自然環境を考えるとそんなに易しいものではない。山道を切り拓く際、高低は少なく斜面は直角にした方が雨による侵食が少ない。しかし、そうするとそこに草木は暑さと雨で根付かない。

(2) 気になったこと

〔良質の木を育て、森林保護をしていては採算が合わない〕

日本は多くの木材を専用の船で輸入しているが、その船を満杯にし出航させるためには、年間2,000ヘクタールの森林を伐採しなくては行かない。

大木は奥地に入らないと採れなくなってきている。また、そうした樹木を植林し、育てていてはまったく採算が合わない。6・7年で伐採でき、採算の合う木が望まれている。

もっと高値で、しかも100年ぐらいの期間を考えて、日本は輸入して行かないと、良い木はなくなり生産国の人には誰も手を付けなくなってしまう。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

・教育協力

やはり、国が栄えるには教育がとても大切だということを痛感しました。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えている事

○学校祭の職員展示コーナーへの参加

今年度の第43回加茂高祭にあるクラスが「世界の現状」と言うテーマで、昭和52年度の本校卒業生が海外青年協力隊員として、マレーシアに参加されていた動機や様子を写真アルバムなどで展示していました。余りにも偶然で驚きと共に感激しました。

○図書館主催の職員による講演会

平成元年度に依頼され、教科書に載っている歌を歌いながら「平和・愛」をテーマにすでに行いましたが、そんな機会をとらえて実施していきたい。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

特に有りません

(2) 研修日程および訪問先

もう少し自由時間が欲しい。マレーシアは良い訪問先でした。マレーシア人といろいろ話がしたかった。

(3) その他全般的な所感

マレー系の人が行政・中国系の人が経済を支配し、インド系の人が運送等の仕事に従事し、密入国者のフィリピン人が建築等の仕事に従事している。そうした多民族国家として2020年に世界の先進国に仲間入りを果たそうと目標を定めている、発展途上の国マレーシア。

言葉は、第1国語がマレー語、第2国語が英語、それに自分たちの民族の言葉を用いなければならない。それだけでも教育に付いて行けない生徒が生まれてくる。

経済国に進もうとすれば、労働力が必要になり、1家に20人ほど子供を
生み育てなければ国の目標は達成できないとか。数が増えればGNPと
か教育とか問題になってくる。高校進学率は48%程、大学となると3%
未滿で海外留学(中国系が多い)をする。とても優秀な大学卒の者がい
るが、その下が空白に近い。

国が発展するためにはさまざまなことが満たされないとできないことを
今回学びました。その中でも、教育の力はとても大切であり、マレーシ
ア人は教えたことの80%以上を吸収できる人々と聞きました。

今後の発展を願うと共に、今回の研修はとても有意義でした。

氏 名 谷 口 武

所属学校 愛知県立春日井高等学校

担当教科 外国語（英語）

(1) はじめに

このたびマレーシア及びシンガポールを訪問する機会を与えられたことに対して、JICA（国際協力事業団）に心から謝意を表したい。

マレーシアでは3か所、すなわちSIRIMにおけるファインセラミック研究プロジェクト、農科大学におけるバイオテクノロジー学科拡充プロジェクト、サバ州造林技術開発訓練プロジェクト、そしてシンガポールでは1か所、日本・シンガポールでは1か所、日本・シンガポールAIセンター、合計4か所のプロジェクト現場を視察することができた。そこで、この視察旅行を通して得た感想を、かなりの独断をこめて書かせていただくことにする。

(2) マレーシアとシンガポール

マレーシア・シンガポール両国における日本の民間企業の活躍ぶりは、目をみはるものがあった。特に、マレーシアでは日本の企業との協力による急速な経済成長の様子を、目で見、肌で感じる事ができた。マハティール首相の「WAWASAN 2020」、つまり西暦2020年までに、マレーシアは先進国の仲間入りをするという意気込みを象徴していた。マレーシアの現状を考えると、マレーシアがマレー人、華人、インド（タミール）人等による複合民族国家であることも考え合わせなければならないと思う。私は短期滞在者にすぎないので、具体的な経験をしたり目撃したりする機会はなかったが、過去には多民族国家であるがゆえの摩擦があったと聞いた。そして、今もブミプトラ政策が存在するという事実の裏返しとして、やはり摩擦はあるのだろうと推測できる。

マハティール首相は、摩擦を乗り越え複数の民族を精神的に統合するために、「2020年」という大号令をかけ、そちらへ国民の目を向けさせているのだと思う。この点に私はシンガポールのリークアンユー前首相との相似を見るのである。リークアンユーはシンガポールが圧倒的に華人優位の国家でありながらやはり多民族国家であるために、「英語」を中心にして行政や教育を推

進する政策を実施した。それは中立言語としての英語から、各民族を等距離に置くことによって公平感を作り出し、国民統合を計ろうとしたと思えるのである。

(3) マレーシアの産業の将来と日本

マレーシアの産業の発展が急速であり、日本の企業の進出や合併により、一層マレーシアの経済が活発化していることは前に述べたが、そのためにマレーシアのGNPが増大していくのは大変結構なことである。この産業の発展にJICAも大きく貢献している。なぜなら、JICAはファインセラミックスの分野やバイオテクノロジーの分野で、多額のODA資金を提供し専門家を派遣しているからである。現在実施されている両プロジェクトが、今後のマレーシアの経済成長に利用されて有効な効果をあげることは間違いがない。ここで、1つ提言がある。民間企業は利潤を追求する企業活動としては当然のことではあるが、生産活動に強い関心を持つ。現在マレーシアの経済が急速に発展していればいるほど、将来その副産物として環境(公害)問題が生じるであろう。その時点になって日本および日本の企業が責任を回避すれば国際世論から大きな非難を受けるであろう。そこで、産業のみならず環境問題においても先進国である日本としては、生産活動に意欲的になるのと同時に、公害防止関連の科学技術をも輸出すべきだと思う。長期的展望に立てば、生産技術だけでなく公害防止技術および設備をも、今から輸出するように努力すべきである。そうすれば、日本が人類全体に貢献することになるし、関連する日本の民間企業にとっても企業活動の一環になると思うからである。ただし、前提条件としてマレーシア政府に今後の経済発展に対する展望を持ってもらい、公害防止の必要性を納得してもらうことが必要である。

(4) サバ州造林技術開発訓練プロジェクト

一方、サバ州における造林技術開発訓練プロジェクトは、少々趣を異にする。このプロジェクトは、マレーシア1国にとどまらず、全地球的な意味において重要なプロジェクトである。地球の温暖化のさまざまな原因の1つとして、熱帯雨林の乱伐が指摘されている。過度の伐採は事実であるが、サバ州を訪れてみて、熱帯雨林の乱伐を環境問題という視点からのみとらえるのは、少

しおかしいのではないかとということに気がついた。つまり、その見方は消費物資のあふれる先進国のエゴではないかと思うのである。熱帯樹を伐採し輸出することによって、サバ州の収入の50%以上がまかなわれている現状であれば、伐採するなど言うのは、やはり先進国のエゴであろう。同種の熱帯樹を植えて商品化（つまり伐採）できるまで100年以上も収入ゼロという状態では、サバ州およびサラワク州の州財政は破綻してしまうわけである。従って、植林をしながらなおかつ計画的に伐採し、商品化（すなわち輸出）できるような状態に保てるようにするのが理想の姿である。JICAとSAFODAとの協力により、5～10年で商品化できる樹木（アカシアマンギウムなど）を計画的に植林していくことは、地球の緑を回復しつつ収入の道をひらく方法として妥当なものであると思う。

造林プロジェクトの現場を訪問したが、樹木を種から発芽させて、2～3センチ程の「モヤシ」よりも小さく細いところから、1本1本小さなポリポットに移植し順次何段階も、より大きなポットに移しかえてゆく。それらの一連の作業と手間を考えるだけで気が遠くなるような気がする。私達は、小さなポットに植えられたものから大きなポットに植えられたものまで、各段階のものを1度に見て感心するだけであったが、その作業に従事したマレーシアと日本の技術者の方々には本当に頭が下がる思いであった。

(5) おわりに

ASEAN各国への日本からの技術、技術者、および経済的援助について、1つ感想を持った。

国際的な援助を求めている発展途上国に対して、できるだけ援助を行うのは先進諸国の義務であると思っている。その意味において、中曽根首相がASEAN諸国に援助を約束したのは正しかった。もしも日本が個々の国々に援助をして、その国内でプロジェクトが実施されるならば、それはごく普通の援助計画にとどまるであろう。従ってプロジェクトの成果も、日本と個々の相手国との間のものだけになってしまう。私が評価するのは、さまざまなプロジェクトが実施されて得られた成果を、援助した国と援助された国の2国だけのものにしないで、ASEAN諸国において成果を発表しあって、共有の財産としている点である。このような方式で多様な援助が実施される

ならば、ASEAN諸国の成長の速度は一層速まるであろう。また、ASEAN諸国の相互理解も深まり連携も強まるであろう。そのような援助を継続的に実施することによって、日本に対する国際的評価も高めなければならないと思う。今後もJICAを通じて意義ある国際協力プロジェクトが実施されることを心から願っている。

氏 名 西 村 健 司
所属学校 滋賀県立国際情報高等学校
担当教科 商業

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

(1) わが国の国際協力の実態を理解すること

- ・わが国のマレーシアに対する技術協力は、毎年順調な伸びを示しており、1988年には前年比34%の大幅増で、5,000万ドルを越え、1989年も4.1%増となっている。
- ・わが国のODA(政府開発援助)全体に占めるマレーシアへの援助額(無償資金+技術協力)の比率は約4%にあたる。
- ・マレーシアに対するJICAベースの技術協力実績は、1953年～89年度累計で、439.4億円で、これは全体(9,521億円)の4.6%を占め、援助供与国中の第4位である。
- ・また、1989年度のマレーシアに対するJICAベースの技術協力実績は45.6億円で、全体(1,016.2億円)の4.5%を占め、援助供与国中の第5位である。
- ・これらをマレーシアからみた場合、技術協力に関し、わが国は1987年(シェア43%)、1988年(シェア49%)と連続して最大の援助国となっている。(2位はオーストラリア)
- ・最近では、着実な経済成長過程にあり、一人あたりGNPも2,000ドルをこえており、先進諸国からの援助は減っているとのこと。
- ・協力事業の内容(1991年度計画)としては、
 - ① 研修員の受け入れ453名。
そのうちには、ルック・イースト・ポリシー(東方に学べ政策)にもとづく東方政策研修員120名が含まれている。
 - ② 150名の青年招聘。
 - ③ 50名の専門家派遣。
 - ④ 単独機材供与8,300万円。
 - ⑤ 日本語教育、農業技術、電子機器の指導等150の分野で活躍する青

年海外協力隊員 88 名の派遣。

- ⑥ 首都圏大気汚染環境調査など 9 件の開発調査。
- ⑦ 専門家を派遣し、研修員を受け入れ、機材を供与して行うプロジェクト方式の技術協力 7 件。

そのうちの 2 つ、サバ州造林技術開発訓練計画プロジェクトとマレーシア農科大学バイオテクノロジー学科拡充計画プロジェクトを今回、見学研修させていただく。

- ⑧ 無償資金協力。
などと、広範囲にわたっている。

(2) それぞれの国の今日的政策努力を理解し、今後の課題を考えること。

- ① マレーシアにおける LOOK・EAST・POLICY (ルック・イースト・ポリシー：東方に学べ政策) について
- ② マレーシアにおける プミプトラ (マレー系市民) 優遇政策について
- ③ シンガポールにおける クリーン・アンド・グリーン政策について

◇

- ① マレーシアにおける LOOK・EAST・POLICY (ルック・イースト・ポリシー：東方に学べ政策) について

1981 年に就任したマレーシアのマハティール首相の提唱する政策のひとつ。これまではヨーロッパの先進諸国に多くを学んできたが、今や見習うべきは目覚ましい経済発展を遂げた東方諸国であるとし、日本や韓国の労働者の勤勉さ (労働倫理) や効率性に学び、非能率とされているマレー系社会を効率性の高い近代社会へ変革することを意図している。

具体的には、先進技術、労働倫理や経営哲学を学ばせようと、日本に多数の留学生・技術研修生が派遣されたり、日本企業の誘致も活発であり、クアラルンプールにあるマラヤ大学には日本語研究センターが開設されており、日本および日本語教育に熱を入れている。

対日不満や、この政策に反発する一部勢力はあるものの、2020 年に先進国入りをめざすこの国の今後の経済発展等を考えると、有益な政策のひとつであろう。

② マレーシアにおけるブミプトラ（マレー系市民）優遇政策について

第2代ラザク首相によって打ち出され、現在のマハティール首相が推進している政策のひとつで、主として、マレー系市民の経済的地位の向上をめざしたもの。1990年を目標に、すべての企業の雇用構成をマレー系50%、中国系40%、インド系10%とし、また、資本構成をマレー系30%、非マレー系40%、外国人30%にするという。

また、大学入学定員の人数構成比率での割り当て、各種国営企業の設立、マレー系企業への金融・公共事業発注などの優先供与、大学教育のマレー語による統一、宗教面におけるイスラムの優位など、さまざまな具体的内容を含んでいる。

人口の半分を占めるマレー系市民が、他の中国系やインド系の人々よりも貧困が進んでいることから、マレー系市民の雇用優先を図ることによって、人種間の経済格差をなくそうと意図したものはあるが、そのことが反面、マレー系市民内部における貧富の差の拡大、非マレー系市民の意欲の低下や、政策の意図とは逆に、マレー系市民の一層の労働意欲減退等をもたらす心配もある。ひとつの政策が両刃の剣となる例であろうが、多民族国家・マレーシアのかかえ、克服すべき難問のひとつであろう。「角を矯めて牛を殺す」ことは許されないであろう。

1991年6月、マレーシア政府は「新経済政策（NEP）」に代わる2000年までの基本政策「新開発政策（NDP）」の大綱を国会に提出した。新政策の内容は、

- ① NEPの重要な柱だったブミプトラ優遇政策の達成期限を設けず、規制緩和等を通じて、より自由な投資環境をつくる。
- ② これまで以上に外資の導入を図っている。
- ③ 人材養成や環境保護にも力を注ぎ、2020年までに先進国入りをめざす。
- ④ 2000年までは、毎年7%の経済成長を達成し、国内総生産（GDP）に占める製造業の割合を37%に引き上げ、失業率を現在の6%から4%まで引き下げる。

⑤ 民族間の不均衡の問題については、マレー系によるプミプトラ商工会の設立などで、質的な向上を図り、インド系など少数民族にも配慮した政策をとる。

などである。(日本経済新聞 1991. 6. 18)



③ シンガポールにおけるクリーン・アンド・グリーン政策について
みどり豊かで、清潔な街づくりをめざし展開している政府のキャンペーン。トロピカルな街路樹と色鮮やかな熱帯植物。この国を訪れた人は、洗練された街の美しさに驚嘆するだろう。

シンガポールには、環境保護と都市美化のための、さまざまな規制や罰金制度がある。街でタバコの吸い殻を捨てたり、タンヤツバを吐いたり、水洗便所の水を流さないと、500 S\$ (1シンガポールドルは約80円で、約4万円)の罰金だし、ホテル・レストラン・バス・劇場内などは禁煙。また高層住宅の建設や電線の地下埋設化など都市政策も進んでいる。

ひるがえって、わが国の状況をながめると、タバコの吸い殻の投棄、ゴミや空缶の散乱など、幻滅を感じる場面が多いのは、まことに残念である。同じ観光立国として、今後改善を要する点ではないだろうか。シンガポールでは、公害対策の一環であろうか、自動車をあまり増やさない方針とのこと。まず、車は定価の約3倍と、非常に高価である。200%近い税金等が課せられるためであり、100万円の車も300万円になる。第2に、新車しか輸入できない。第3に、車の台数制限があり、注文しても、なかなか手に入らない。もし急を要する場合には、特別料金(これがまた高価とか)を支払えば少し早く手にはいるクォーター制もある。第4に、廃車期限が決まっている。

(8) 労働力需給(労働力不足)、賃金、物価、くらしの状況などについて理解すること。

東マレーシアのサバ州(カリマンタン(ボルネオ)島の北部)は、低賃金で高物価なところと聞く。平均給料は月400 M\$ (1マレーシアドルは約50円で、約2万円)程度で、首都・クアラルンプールでの3~4万

円より少し低い。平均日額 800 円は、わが国のほぼ 1 時間のパート賃金程度である。もし、日本へ出稼ぎに行くと、約 10 倍の収入となろう。1 カ月働けば 10 カ月分の収入となり、1 年間働けば約 10 年分の収入が得られる。このことは非常に注目に値すると思われる。この国に限らず、賃金格差と国際労働力移動との関係は、受け入れ国にとって、労働力不足の解消策と関連して、経済問題のみならず、社会、民族、政治問題など広範な方面にさまざまな影響を及ぼす点から、おそらく今後も不可避的な課題となるであろう。

ちなみに、日本で 1 リットル 120 円台のガソリンは 1.05M\$ (約 53 円) と、産油国マレーシアとしては高い。

一方、人口 270 万人のシンガポールでは、外国企業の駐在員、建設作業員、工員など合計 15 万人以上の外国人が働いているという。外国人労働者には業種を制限し、企業別には全従業員の 40% までという制限がある。(日本経済新聞 1991. 6. 24)

シンガポールから約 1 キロの国境の橋 コーズウェイ を渡ればマレーシア。シンガポールから空に近いガソリンで橋を渡り、満タンにしてシンガポールに戻る人々が多いという。マレーシアの安価なガソリンを求め、買物をして帰るためである。その影響で、マレーシアの物価は上昇気味で、困っているとか。歯止め策として、最近では、橋を渡る時メーターを調べ、ガソリンが 1/2 とか、2/3 とか、3/4 とか以上ないと入国できないように改められたとのこと。いずれも同じ、物価格差のなせる業、よくわかる話だ。

なお、わが国においては、日本商工会議所および東京商工会議所は、経済 4 団体として初めて、「当面は目的や期間、人数などに条件を設定したうえで、認めるべきだ」という線で、外国人労働者の条件つき受け入れを提言している。(朝日新聞 1991. 9. 14)

(4) それぞれの国の教育制度の特徴について理解すること。

- ① マレーシアの教育制度について
- ② シンガポールの教育制度について

◇

① マレーシアの教育制度について

マレーシアでは義務教育はないが、就業年限 6 年の初等教育の就学率はほぼ 100 % であり、大学準備課程までの授業料は無償。学校教育制度の概要は次のとおりである。

段 階	就業年数		日本でいえば	就学率 (1986)	備 考
初等教育	6年	PRIMARY SCHOOL	小学校	97%	読み・書き計算に重点
中等教育 SECONDARY SCHOOL	7年	下級中等学校 3年	中学校	85%	
		上級中等学校 2年 ・普通教育 ・技術教育 ・職業教育	高校 2年まで	48%	
		大学予科・専門学校等 2年		16%	
高等教育		大学 大学院		2.5%	国立大学 6校 国際イスラム大学

◎ 統一試験制度について

教育省の行う全国統一学力テストが各段階で実施される。このテストは修了試験であるとともに、次の学校への選抜資料であり、入学試験の働きも兼ねている。大学の入試制度も、各大学で行って受験するのではなく、統一テストの成績と願書にもとづいて、大学選抜センターで大学合格が決定される。

全国統一学力テストは、これまでは 3 年生と 5 年生で実施されていたが、現在では、小学 3 年のテストは廃止され、5 年のテストは 6 年に改められている。

マレーシアから日本への留学生は、1987 年現在 1,120 人で、全留学生の 5.1 % を占めている。

高等教育に対するニーズは高く、入学を希望しながら果たせなかった者が多く、22,684 人が海外の大学・大学院等へ留学している。(1985 年)

これは、国内の高等教育機関学生の 37,838 人の約 60% にあたり、今後の対応策（拡大計画）が強く望まれるところであろうか。

◇

② シンガポールの教育制度について

シンガポールには義務教育の制度はないが、初等教育の就学率は、ほぼ 100% である。小学校 3 年終了時から成績至上主義の選抜試験が始まる。小学校 3 年終了時の選抜試験で、卒業後に初級中学に進むコースと、職業訓練所に進むコースに別れる。

初級中学に進むと、国家試験を受けて成績順に高級中学に進むコースと職業訓練学校に進むコースに別れる。高級中学卒業時にまた国家試験を受けて、成績に応じて大学への受験資格を取得する。大半は、この時点で就職する。

国立シンガポール大学等を卒業すれば、エリートとして厚遇される。もっとも、最近では、厳しい教育制度も、緩和の方策が打ち出されたようである。

2. 国際協力の現場で、参考になったこと、気になったこと。

(1) 地球規模の危機…森林資源の保護増産は急務

現在、発展途上国を中心として、すさまじい森林破壊が進行している。特に、人類にとって有用な食料、燃料、工業原料などの供給源である熱帯林の破壊は深刻で、年間 2,000 万ヘクタール、ほとんど本州と同じ面積が消え去っているという。

こうした熱帯林の急激な減少は、二酸化炭素の大量放出、気象への悪影響、野性動植物および少数民族の絶滅化、砂漠化、などを通じ、人類や地球全体の生態系にはかりしれないさまざまな影響を及ぼす。

このことは、単に、特定地域や当事国の問題にとどまらず、全世界に深刻な影響を及ぼす緊急かつ重大な問題であり、相互依存の関係のなかで各国は、それらの破壊進行の防止と、積極的な森林資源の保護増産に最大の努力を傾注しなければならないであろう。

こうした時期にあって、マレーシア農科大学バイオテクノロジー学科拡

充計画プロジェクトにみる最新のバイオテクノロジー技術を駆使した遺伝子操作、植物培養等研究開発への取り組みと、森林資源の保護増産に寄与するサバ州造林技術開発訓練計画プロジェクトの活動は、まことに意義大きいものがあり、研究開発の努力と成果が、自国のみならず、世界の関係諸国にも提供されることが、国際協力と世界平和のために強く望まれる。

今回の協力現場での見学研修を通じて、森林資源の破壊と状況と、それらの防止と保護増産のための努力の必要性を理解する点で、大いに役立った。

3. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること。

- (1) 1992年の全国高等学校国際教育研究大会(滋賀大会)、滋賀県高等学校国際教育研究協議会研修会等の機会を通じ、今回の研修成果を報告したい。
- (2) 授業等において、わが国との対比における各国の特徴を説明し、国際理解の視点と国際協力の必要性について考えさせる資料を提供したい。
- (3) 研修成果を滋賀県高等学校国際教育研究協議会機関誌「国際教育」および滋賀県高等学校商業教育研究会機関誌「商業教育」等に寄稿したい。
- (4) 上記の各場合を通じて、もの・資源の有効利用、環境の美化保全への配慮、理性にもとづく自己規制および自国・相手国の知識・情報と語学力を含む国際コミュニケーション能力を備えた、視野の広い国際人をめざす必要性等について、提起したい。

4. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

- ・研修終了後の成果報告等の準備や整理のためには、1週間程度日程を繰り上げ、盆の直後に出発するほうがありがたい。
- ・研修期間は、10日間程度が適当と思われる。

(2) 研修日程および訪問先

- ・全体にゆとりをもった日程と、マレーシアに主力を置いた研修プログラムは適当であったが、シンガポールでの日程は、少しハードであり、もう1日ほしかった。
- ・訪問先は、各方面における最先端の研究開発分野を中心にバランスを考えた選定で、適切であった。

(3) その他全般的な所感

① 国際理解と協力の期本的視点

他人に迷惑をかけてはいけないのと同じように、相手国に迷惑をかけては駄目。先進国のエゴを出さずに、相手国のためになる配慮と努力こそ大切。

② 望まれる総合的環境浄化対策

マレーシアでは、工業化の進展とあいまって、進行しつつある大気汚染の防止や、都市環境の美化保全をはかるため、車の排気ガス規制を導入し、バス・タクシーなど営業用車両に限定されている車検制度の対象を自家用車にも広げるなどの総合的な環境浄化対策が望まれる。

③ 早期の選抜的成績至上主義の教育制度に不安

人間の潜在的能力を顕在化させ、伸展させることこそ教育的営みであるという点を考えるとき、小学3年から始まるシンガポールの選抜的進路指導を含む成績至上主義の教育制度には、一抹の不安がよぎる。

④ 環境・都市美化政策に学ぶ

規制・罰則を含むクリーン・アンド・グリーン対策には、問題なしとしないが、同じ観光立国として、シンガポールの都市の美しさから見習うべき点も多い。

⑤ 国際コミュニケーション能力の必要性

国際化の進展する流れのなかで、自国・相手国の知識・情報と語学力を持ち合わせた国際コミュニケーション能力を養うことが、これからの国際社会で生きる人間にとって不可欠であり、観光・ホテル業のみでなく、多くの産業分野で望まれてくるであろう。

⑥ 理性という名の規律

人々は、その国のさまざまなルールや宗教などとの関わりのなかで生

活している。自由社会に生きる人間にとって、それらとともに基本的に必要なことは「理性という名の規律」にもとづき、自他ともによりよく生きようと努力することであり、ものや資源を大切にすること。環境の美化保全への気配り等は、人間にとって大切なことのひとつではないだろうか。

- ⑦ おわりに、貴重な研修の機会を与えていただいた JICA の関係各位に心から感謝申し上げます。

(1991. 9. 15)

氏 名 吉 田 浩 実

所属学校 京都府立農芸高等学校

担当教科 農業

1. 視察において主眼をおいた点

- ① マレーシア・シンガポールの経済・産業・教育などの実状を正しく理解すること。
- ② マレーシアの1次産業（特に農業）実態と技術力を知ること。
- ③ 日本の協力事業の実態を知ること。
- ④ 文化・習慣の違いと協力事業の関係。
- ⑤ 発展途上国の光と影を実感してこること。

2. 国際協力の現場で

(1) ファインセラミック研究プロジェクト

中曽根首相が、ASEANと科学技術を分かち合う観点から始められた技術協力で、日本側からは科学技術庁・無機材質研究所が中心になって協力を進めている事業。

技術的なことは専門外なのでくわしく理解できなかったが、ASEAN諸国も最先端技術を必要としていることがわかる。技術立国日本としてどのように協力されていくのか興味を持った。実際行っていることは基礎的な内容が多かったように思う。やはり、技術を学んでそれをどのように応用していくかはマレーシアの人たちが決めることであろう。

ただ、このようにすぐにお金につながらない研究のために、プロジェクト事業終了後マレーシアがどれだけお金をつぎ込めるか心配になる。これは私の認識不足で、マレーシアでは十分進めて行けるだけの地盤があるのかもしれないが…。また、このプロジェクトでどの程度技術者・研究者が養成できたのか、不安が残る。機械操作のマニュアルも英語版がないものについては日本からの専門家が英訳されていた。大変な作業であり、頭が下がる思いがした。

設備については最新のもものが導入され、立派であった。日本のプロジェクトチームの人から聞いたところでは、設備は最新式のものも多く、日本の研究機関や大学では考えられないような機械が揃っているとのこと。この施設を利用して、マレーシアがすばらしい成果をあげられることを素直に希望した。それとともに、日本の大学（特に国立大学）では、旧式の設備で何を研究するのか？時代についていけるのか？心配になった。

(2) 農科大学バイオテクノロジー学科拡充計画

1986年に設立されたバイオテクノロジー学科の充実、設備及び人材の育成を図ることが目的で実施されている協力事業である。

大学を見学して、まず敷地の広さに驚き、羨ましく思った。大学の農場が見渡す限り広がっており、管理も行き届いていた。農場やキャンパスの管理のため、かなり多くの管理者が雇われていることだろう。建物については、日本の大学の方が頑丈で美しいと思うが、中に入っている設備はJICAの援助で充実していた。

学生の授業風景も見学させてもらったが、3分の2が女学生であることにまた驚いた。日本と同じように女性の進出がめざましいのだろうか。学生は楽しそうに実験をしていた。様子を見てどこの国の学生も変わらないと感じたが、気のせいかもしれないが日本の学生より目が輝いていたように思う。卒業後の進路をたずねると、日系企業への希望が多いとのこと。また、専攻とは関係のない産業への就職も多々あるということだった。

学科の教育スタッフの構成をみると教授・助教授の数の少ないことに驚く。教育システムの違いからくるものなのか？優秀な人材を養成するのであればもっと指導者を多くしなければならないだろう。指導者の養成が遅れているのかもしれない。また、いろいろな説明を聞くにつけ、大学でも最先端技術の導入に力を入れていることを感じた。

(3) サバ州造林技術開発訓練計画プロジェクト

大学で専攻していた分野なので、最も興味を持っていたプロジェクトであった。

サバ州は南洋材の重要な供給地であり、州財政の過半を木材輸出とその関連産業に依存している地域である。近年、商業的伐採や大規模農園造成・過度の焼き畑移動耕作などにより、同州の森林資源は急速に減少劣化している。そこで、州政府が伐採跡地・農業放棄地などを対象にの早成樹種の造林事業を進めることになり、その技術協力をするためこのプロジェクトがつけられた。プロジェクトのねらいは、7～9年でチップ材として伐採可能なアカシアマンギューム等の早成樹種の造林技術の確立と、中堅技術者の養成にあるということだ。

現地を見学して感心したことは、アカシアマンギュームの成長の早さである。スギ等では考えられない早さだ。種をまいて3カ月で植林可能な大きさに成長し、植林後の成長は1年で4～6mということである。実際植林後3年目の林地で、樹高8m近くに成長していた。表層土がほとんどないこの林地で、ほんとうにこれだけ成長したのか信じられない思いだった。

雨による侵食のすごさにも驚いた。水の流れた後が斜面に爪でかいたように残っている。この雨のため表層土の流出も激しく、1cmの厚さもみられない。土地を肥沃にするにはなみたいていではないと実感した。このような熱帯地方の森林復元は想像以上にたいへんであろう。話を聞くと、この地域では伐採跡地をそのままにしておいてもはげ山にはならず、草木がそれなりに生えてくれるらしい。しかし、その草木は産業資源にはならない。また、いままで伐採してきた輸出できる南洋材の森林にするには何百年もかかるということであった。世界の森林資源が問題となっている現在、森林復元は大きな課題となっているが実際そのことにたずさわることはたいへんであろう。

森林破壊を考えると、とかく木を切った人が非難されがちだ。このサバ州でも、今までに、売れるからと言う理由だけで貴重な南洋材を何も考えずに伐採し、収入を得てきた。また、安くよい木材を得られるから日本がどんどん伐採させ輸入してきた。このように考えられなくもない。しかし、消費経済がここまで進んできた時代、よりよい生活を求めて森林を伐採してきたことを単純に非難できるだろうか。先進国の生活を知り憧れ、それに近づくため現金収入の手段として伐採してきたこと

が悪いことなのであろうか。これについては簡単に結論を出すことはできないと思う。

このことを考えるとき、大学時代に行った屋久島のことを考える。屋久杉は生態的にも大変貴重な森林資源である、一方では屋久島の貴重な現金収入源である。この屋久杉を手をつけずにそのまま保存できれば問題はないが、屋久島で生活している人たちにとっては、より快適な生活をするための収入源であるために、切らないで置いて置くことはできない。それではどうすればよいか？大学時代に持った疑問が思い出された。自分自身このことについて答えを出せないでいる。

サバ州の南洋材についても屋久杉と同じことがいえる。南洋材を伐採しないことには、向上してきた今の生活を維持することはできない。さりとて、伐採を今後も今のペースで続けて行けば、森林資源を食いつぶしてしまい収入源をなくすばかりでなく、いま住んでいる環境を思いもかけぬ悪いものにしてしまう可能性がある。何とかこの造林技術が確立され、植林事業が成功し、森林の有効な利用ができるようになることを期待したい。

(4) 青年海外協力隊員との懇談

サバ州で活躍する青年海外協力隊員との懇親会がもたれた。ひとりで現地に入り、それぞれ自分の与えられた仕事に取り組んでいる生の声が聞けて大変有意義であった。いろいろ聞いてみると、都市部と地方の農村部ではかなり生活状況が異なることがわかった。自分がいままで見てきたのはマレーシアの都市が中心で、主に発展途上国の光の部分であり、地方のことはなにひとつ知らないことに気づいた。協力隊員は主に地方に出向いて活躍しているとのこと。価値観が違う全く異質の文化のなかでの活動は、私達の思いもよらないことが多く、さぞや大変だろうと想像する。頭の下がる思いである。しかし、協力隊員の方々はみんな明るく苦勞を顔に出されていないのに感心した。自分の仕事に生きがいを感じて頑張っておられるのだろう。ただ気になったことは、隊員のやってこられたことが、帰国されてからもどれだけ現地に定着するのかを心配されていたことである。価値感や習慣をかえることがいかに大変か、の

ぞき見たような気がする。できれば研修の中で、農村部での事業見学や協力隊員の現場を視察できればよかったと思った。日程は難しくなると思うが、やはり協力事業やその国の影の部分を見ることも大切であると思う。

(5) 日本・シンガポール AI (人工知能) センター

これぞまさしく最先端技術の協力事業である。人工知能については日本でも盛んに研究が進められている。これからのコンピュータを作り出す技術である。

センターは都市の郊外にあり、近くに大学もあり、環境抜群の所に立地していた。建物や住環境も日本の施設よりすばらしいものであった。事業の主な内容は、AI についての基礎を教えることが中心となっており、次の4つのコースを設けて教育にあたっていた。

① マネージャー用研修コース……一般向け研修、AI の基礎から教える。

期間 3日間

② ビジネスプロフェッショナルコース……AI の応用を教える。各分野の専門家対象

期間 2週間

③ プログラマー養成コース……AI のプログラムを基礎から教える。

期間 3カ月

④ SE 養成コース……AI のプロトタイプ作成、システム作成

期間 6カ月

その他、日本の専門家を呼んでの講演会の実施も行っているとのこと。シンガポールともなれば東南アジアでは香港と並ぶ商業都市。必要とする技術も程度が高いことに感心した。

ただシンガポールの期待と JICA の事業目標との違いが気になった。シンガポール側では AI で役にたつシステムを作ってもらうことを希望しているのに対し、JICA の目的は AI でシステムを作れる人の養成に主眼を置いていることである。これはいたしかたないことであると思った。

3. 紹介すべき協力、プロジェクト

一言でいってしまえばすべてである。日本が諸外国に対しどのような協力をしているか知らない人が多すぎるからである。自分自身この研修に参加するまでどれだけ理解できていたのだろうか。恥ずかしいかぎりである。まずは日本がどれだけの協力事業をしているのか知らせることが何よりも重要である。また、東南アジアの諸国をすべて同じように考えていたことに大きな間違いがある。マレーシアやシンガポールのように順調に発展をとげ、必要とする技術協力も高度になっていることに注目しなければならないと思う。日本人がいままで持っているイメージを捨て、正しく諸国を理解することの大切さを感じた。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策など

海外研修を受けた一人として、身近なところから研修の報告をしていかなければならないと思う。まずは、研修中に写したスライドなどを授業で紹介し、生徒たちに発展途上国の状況を説明したい。また、農業を考えると、日本の農業だけに目を向けるのではなく、世界の農業情勢を理解させて行わなければならないと考えるようになった。また、農業技術者を目指す生徒に対して、農業と自然環境の問題、世界の農業に対して日本人がどのようにかわれるか？ 商社等が行っている日本人にあった農産物の外国での生産状況やその技術についても触れて世界の農業について考えられる人間にしていきたい。また、自分自身英語が不得手で不自由な思いをしたので、英語を含む語学の重要性を生徒に伝えて行きたい。農業の教員ではあるが、これから世界にはばたく人間になる可能性を持つ生徒にその点を訴えて行きたい。

5. 感想、意見

(1) マレーシアについて

① クアラルンプール

かなり整備された都市というイメージを受ける。レイクガーデンなど公

園も美しい。中心街はにぎやかで大きなショッピングセンターの中はほとんど日本とかわらない。日系のデパートも進出しており、日本製の品物も数多くそろっていた。日本の海外進出を目の当たりに見た感じがする。また、高層ビルも数多くあり、マレーシアが繁栄していることがうかがわれる。

JICA事務所から空を見ると、雨期の関係かもしれないがどんよりとしていて青空がみえない。聞くとスモッグがひどいとのこと。十数年前日本で大きな社会問題になった環境問題が生じているようだ。先進国の失敗を繰り返さないよう期待したい。

② サバ州

サバ州の州都コタキナバルはクアラルンプールに比べてこじんまりとした地方都市である。街の雰囲気は、自分としてはこちらの方が落ち着いた感じを受ける。この街にも日系のショッピングセンターがあり驚いた。住んでいる人々は中国系の人が多いように感じた。また、マレー系とは違う原住民の姿がうかがえた。観光都市でもあり、近くの海は非常に美しい。小さな山が間近にあり、郊外は緑が多い。日本のさほど美しくない海のリゾート地に高いお金を出していくよりも、こちらへ来てのんびりする方がよいと思った。同じことを思う人が多いのか日本人の観光客を数多く見かけた。近くにキナバル山があり、森林資源もまだまだ豊富である。是非もう一度訪れたいと思った。

③ 教育

マレーシアは教育にかなり力を入れているようである。教育制度も整備されており感心した。また、全国统一テストが一定学年に課せられており、この試験結果により、今後の進路がほとんど決定されるようだ。つまり、次の学校への選抜資料となり、入学試験の働きもしているらしい。教師にも生徒にも厳しいテストである。

大学の入試制度も、日本とはかなり異なり、それぞれの大学に行って受験するのではなく、統一テストの成績と願書に基づいて、大学選抜センターで大学合否が決められるそうだ。国内の大学は国際イスラム大学を除きすべて国立で6校ある。大学進学率は2.5%と非常に少なく、大学卒はこの国では超エリートとなる。国内の大学に行けなかった者の多く

は、海外の大学へ留学しているとのこと。そのためには、かなり経済力が必要であろう。国を発展させるためにも大学の増設が望まれる。

国立大学生をみるとマレー系の学生が多い。これは、国の経済は中国系の人達が握っているため、国策としてマレー系の人達の優遇政策が取られているらしい。そのことは教育の分野でも反映しており多民族国家の難しさを感じる。

④ 食 事

食べ物概ねおいしかった。多民族国家なので各国の料理のレストランがあるが、マレー料理・中華料理の店が多いように感じた。ホテルには日本料理の店もあった。ガイドの人が中国系だったので、紹介されたレストランは中華料理が多かった。このあたりにも人種間の仲間意識があるのだろうか。またまた、多民族国家の複雑さを見た思いがする。

レストランで食事して、その値段の安さに驚く。たぶん自分達は高級なところで食事しているのだろうが、日本では考えられない安さである。マレーシアは、東南アジアでは物価は高い方であるので、他国ではもっと安いのであろう。日本の物価の高さをあらためて実感する。

⑤ 果 物

熱帯系の今までに食べたことのない果物を食べられたことは楽しかった。自分は授業で果樹を教えているだけに、ひとつひとつ興味深くながめ、味わったつもりである。果物の王様ドリア、果物の女王マンゴスティーン、をはじめスターフルーツ、マンゴ、ランブータン等それぞれ独特の味をもちおいしかった。なかでもドリアは何ともいえない香りを持ち、個性の強い味わいであった。現地の人は大好物であるのだが、食べ慣れない者にとっては抵抗があるだろう。これほど好き嫌いがはっきりする果物もめずらしいと思う。ただ、現地に長く滞在している協力隊の人達は全員大好物とのこと。この土地に住む者にとっては、はかりしれない魅力が潜んでいるのであろうか。

⑥ マレーシア

東南アジアの一国として漠然としたイメージしか持っていなかったが、クアラルンプールの中心街をみると日本とあまりかわらないのに驚いた。発展途上国も着実に伸びてきていることを実感した。ただ、中心街を外

れるとまだまだ貧しい一面がみられた。JICA事務所で聞いた話では、「2020年には先進国の仲間入りを果たす」ことを目標に諸計画が進められているとのこと。実現できるかもしれないと思った。

また、工業化が進む中、労働者不足の問題が生じているらしい。発展途上国で思いもよらない話を聞いた。地方から労働者を吸収していけば現在の日本が抱えている過疎問題につながりかねない。外国人労働者を受け入れていくこともいろいろな問題をしょいこむことになる。どの国でも課題は多いようだ。

(2) シンガポールについて

シンガポールの空港がすばらしい。日本の成田空港とはくらべものにならない程大きく、施設も立派である。商業都市として活躍する一面を見た思いである。街は美しく、建物もすばらしく、近代化が進んでいる。大きなショッピングセンターやブランド店が立ち並び、旅行社の「買物天国」といふキャッチフレーズが実感された。また、夜のひとり歩きも問題なく、治安の良さを示している。日本の援助が本当に必要なのか？という思いを持った。また、街を歩くと日本人をよく見かけた。かなりの観光客が訪れているのだろう。

(3) 研修の時期及び期間

農業の教員として学校行事などの関係から、この時期は適当と思う。期間についても、日程的に少し苦しい面があったが、適当であると思う。

(4) 研修日程及び訪問先

研修日程は半日で1カ所ということで無理もなく良かったと思う。ただホテルの出発時間が少し遅かったり、昼食に時間をかけすぎて、見学先での時間が少なくなってしまうことが残念に思う。また、飛行機での移動が多く、搭乗手続きなど移動に多く時間を費やしたこともすこし不満がのこる。個人的な意見だが、サバ州はもう1日滞在したいと思った。訪問先は各分野の協力事業がみれていろいろ参考になった。できれば、プロジェクト事業だけでなく、青年協力隊の現場視察を入れてほしかっ

た。また、農村部の視察もしたかった。

(5) その他全般的な所感

自分にとって初めての海外研修であり、不安いっぱいに出発しましたが JICA の人達のご好意により、無事終了することができ感謝しています。本当に充実した研修ができました。ありがとうございました。

研修を終え、自分の無知を思い知らされたような気がします。日本の海外協力についても、マスコミが伝えることをうのみにするのではなしに理解できるようになったと思います。JICA の地道な努力を身をもって知ることができました。また、農業の教員として、これからの農業は世界に目を向けて考えて行かなければならないことを実感できたように思います。

おわりに、同行していただいた JICA の前川氏に心からお礼申し上げます。

氏 名 阪 口 光 治
所属学校 大阪府立泉南高等学校
担当教科 校長（英語）

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

これまでに何回か海外旅行をしたが、発展途上国を訪れるのは初めてのことであったので、ODAがどんな形で使われ、どのようにその国に貢献しているかを綿密に見て来たいと思った。特に、マレーシアについては、第2次世界大戦中の日本軍の行為により多大の迷惑をかけたが、そのことが現在の対日感情とどのようにつながっているのか、また逆にハリマオと呼ばれた人物のことや、戦後イギリスから独立するに到るまでに日本が何らかの貢献をしたのか、といったことも調べたいと思った。

2. 国際協力の現場で

(1) 参考になったこと

クアラ・ Lumpur の J I C A 事務所を訪問したが、会議室でお二人の方から「協力の概況」と「協力隊員の配置状況」を説明してもらった。マレーシアに対する技術協力の難しさ — 技術革新が比較的進んでいるマレーシアに技術協力が必要かという批判とか、政府貸付が 1986 年、1988 年にはマイナスになっているという状態とかの中での難しさがあるということがわかった。

S I R I M のファインセラミック研究プロジェクトとマレーシア農科大学バイオテクノロジー学科拡充計画及びシンガポール A I センターの 3 ケ所では J I C A が、高価な機材を数多く無償供与している状態をつぶさに見せてもらった。これらの機材は国内の大学教授が見れば、垂涎の的となるものばかりと教えられた。

最も参考になったのは、サバ州造林技術開発プロジェクトでした。実際に技術協力の成果を具体的に目で見ることができたので感激はひとしおであった。特にチームリーダーの国井氏の説明の中に、真にこのプロ

プロジェクトを通じ、この国の経済発展を願い、ひいては地球環境の浄化まで見通し、この国の人々の感情まで十分汲みとって事業を進めておられる様子がよくわかり、感銘した。

(2) 気になったこと

JICA事務所の会議室以外にも案内してもらい、現地で職員の方々がどんな活躍しておられるのかも見せてほしかった。

全体的にJICAのプロジェクトの定められた期間が満了した後、プツンとその事業が途切れてしまわないかという心配と、AIセンターの場合、どのレベルまで向上した時を協力の終了時とするかなどの疑問があった。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

日本の商社による熱帯雨林の乱伐がマスコミで罪悪視して報道されているが、木材を輸出しなければやっていけないその国の事情というものがあり、また現地民の焼畑農法による森林資源の減少劣化があり、さらに、故意または不注意による山火事の被害が大きいということを知ってもらった上で、サバ州の造林技術開発プロジェクトを大々的に紹介すべきだと思う。この計画は単に木を植えるというだけではなく、早い時期に再び森林資源として伐り出し、この国の経済に潤いを与えられるような早成樹種の造林につとめ、林道を整備し、このプロジェクトを継承していく技術者の養成を行なっているという、遠謀深慮の計画である。ひいては地球環境の浄化にも役立つものである。農業放棄地や伐採跡地の荒涼とした風景写真とアカシアマンギュームが整然と育っている風景写真とを対比して示せば、非常に具体的な姿でJICAの海外援助の実態をアピールすることができると思う。農科大学でのハゼの養殖の成功も、マレーシアにとっては非常に有益な技術援助だと思う。他の魚との値段の差が15倍ということを知ると尚一層その感が深かった。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

9月2日の始業式の式辞の中で、サバ州造林技術開発訓練計画の概要とその意義について全校生徒に講話をした。また本校は全校生徒が登下校時、下足室で上履と履きかえるシステムになっているが、毎朝エンドレス・テープに録音した校長の「朝の1分間スピーチ」を下足室で再生して聞かせている。

9月9日の分に、日本の四季の移り変わりがあることとマレーシアの1年中33°か34°という気温のことを話し、残暑の厳しさに苦情を言いたいと思った時、熱帯や中近東の砂漠地帯で現地の人々の福祉・幸福のために活躍している青年海外協力隊員のことを思いだすように、といった主旨のスピーチを入れた。

9月6日、大阪高等学校国際教育研究会役員会の席上で、今回の研修旅行についての報告を、レジメを配布して行った。来年度もJICAは、加盟校数も多く、しっかり活動している大阪から1名推薦するよう連絡があると思うので、来年度は役員の中から出してもらうので、推薦できるよう日常の国際教育に更に一層力を入れておいて欲しいと付け加えた。

10月11日、研究会に加盟している学校の窓口担当者の研修会を予定しているが、その機会を利用して、報告したいと思っている。その他、高校生対象の留学生を囲む会など、本研究会のすべての行事の開会の挨拶の中にJICAの活躍の模様を盛り込むつもりである。

5. 所感および意見

(i) 研修時期および期間

大阪府立高校では殆んどすべての学校が、8月の最後の10日間を3年生の補習の補充授業にあてているので、3年を担当している先生にとっては、出かけるのにくい時期である。勿論1年に1名ですから、3年を担当していない年に推薦すればよいのですが、最善の時期は8月10日からだろうと思う。部活動の指導もお盆休みという可能性もあるので、好都合だと思う。全日本国教の総会も例年8月の20日すぎに開かれているということもあり、全日本で熱心に活動しておられる方が30数名出席できないというのも惜しい気がする。期間は9日間でしたが妥当な期間と思う。

(2) 研修日程および訪問先

まずJICAの協力事情により訪問先が変更されるべきだと思う。海外研修が最も効果的にできる所を選んでいただき、毎年方面も変えてもらったら、協力がいかに広般にわたっているかを理解してもらえらるでしょう。

今回私が参加させてもらった研修日程については、現地と綿密に連絡をとってもらっていて、とてもスムーズに、効果的に研修できたと喜んでます。ただ一点、日曜日は市内見学とか、観光的色彩を色濃く含めて計画していただいて有難かったのですが、クアラ・ Lumpur から、マラッカまで行き、またクアラ・ Lumpur に帰り、翌日、シンガポール経由でコタ・キナバルへ行くという日程はロスが多く勿体ない気がした。マラッカから鉄道でシンガポール入りさせてもらえば良かったのではないかと思う。

コタ・キナバルまで行ったので、何とかサンダカンまで行けたら、更に有意義であったのにも思った。その代りに、サピ島でゆっくり出来たので、結果的にはどちらをとるかは難しい。

(3) その他全般的な所感

JICAの海外協力・技術援助の実態を研修するのが主目的であるので、JICA派遣ということで宿泊費、食費まで出してもらいたかった。確かに良い体験をさせてもらうのだから、若干の自己負担があっても、1人でも多く参加してもらおうということに意義があるということは容易に理解できるのだが、文部省より海外教育事情の視察に派遣された時は、ホテルは2人1室で食事の時の飲物代と朝食や昼食で各自ばらばらで食べる時の食費以外は全部文部省が負担してくれたので、JICAの場合も、ホテル代は節約して負担してもらったらどうだろうか。派遣されているということで心構えが変わって来るであろう。

それと人選の方法であるが各府県の教育委員会を通じ、国際教育研究会会長に推薦を依頼してもらえれば、各府県で出張扱いにしてもらえるのではないかと思う。少なくとも職免扱いにしてもらえるのではないかと思う。その辺りの検討をしてもらおう好時期だと考える。なぜなら、臨教

審答申以後、各府県とも国際教育に力を入れて来ているからである。日本の国際化はひとり外務省だけでなされるものではないし、まして文部省だけでなされるものでもない。この時に省の壁を越えて、国際教育の伸展を図る努力をすることが、正に政治の国際化への第一歩になるのではないかと考えるからである。

素晴らしい体験をさせてもらったことに対する感謝の気持は誰にも劣らないつもりであります。随行していただいた、中国支部の前川晶氏のこまやかなご配慮に、特記してお礼を申し上げます。ありがとうございました。

また、年長ということで研修団長という重責を仰せつかったのですが、団員の皆様方の積極的なご協力を賜り、何の事故もなく無事研修を終えることができました。団員の皆様方、本当にありがとうございました。同窓会は仙台でと決まっております。再会をたのしみにしております。

氏 名 藤 井 宏

所属学校 広島県立安芸府中等学校

担当教科 社 会

1. はじめに

平成3年8月21日から8月29日の9日間、われわれ12名の高校教師は、マレーシア・シンガポールの研修旅行をおこなった。

この研修は国際協力事業団（JICA）の主催によるもので、国際協力事業団の海外での活動状況を現場教師の目で視察し、日本の国際協力の実態を教育現場で教育内容とし教材化して、生徒の国際理解力の育成の一助としていくことを目的とするものである。本年度は、フィリピン班、ブラジル・パラグアイ班、マレーシア・シンガポール班の3班の派遣がおこなわれ、私はマレーシア・シンガポール班の一員として研修を行った。

恥かしい話であるが、私は高校の社会科教師でありながら、この研修に参加して、国際協力事業団の仕事を実際に視察し、各地で説明を受けるまでは、事業団の仕事を含め、日本の政府開発援助（ODA）の実態についてほとんど何も知らなかった。正直に言えば、知っているつもりであったが、その理解は知らないに等しいものであった。

参加するまでの私は、国際協力事業団は、青年海外協力隊を発展途上国に派遣する仕事をしている組織であるとの理解しかなく、また日本の政府開発援助（ODA）が毎年増加し、その額がアメリカを抜いていることは知っていたが、それがどのように使用されているかについては、具体的には何も知らない状態であった。

ただこうした無知な状態でありながら、授業では、日本のODAの額の増加を話しつつも、その援助のありかたの問題点を指摘する面が多く、具体的にどのような援助が行われ、世界の中でその援助がどのような意義を持っているかという、プラス面の評価を行うことはほとんどなかった。（それは実態について知ろうとする努力を行ってきていなかった、自分の不勉強からであった。）

こうした恥ずかしい認識しかなかった私であったが、この研修に参加したこ

とで、まず自分の不勉強と認識不足を自覚させられ、日本の国際協力の実態とその意義を考えていくことができ、国際理解教育の今後の進め方に大きな方向付けを持つことができた。その中で、私が一番自分の無知を自覚させられ、国際理解教育の中で是非強調していきたいと思ったのは、次のことである。

それは、日本の海外援助の理念についてである。これまで私の“援助”についての理解は、「困っている発展途上国に豊かな日本が余っているものを与え、少しでもその国の困窮の状態を助けてあげる」という、災害時の被災者救済的な発想のレベルであった。しかし、今回、国際協力事業団のクワラルンプール事務所の湊技術協力課長の事業団活動の内容説明と、各地のプロジェクトの視察によって、“援助”は、各国の自助努力と人材養成への“協力”であり、あくまで対等な関係を前提としてという、“援助”の理念を教えられた。そして各“援助”は、あくまでも現地の要請によって行われ、相手側の不足分は“援助”側が補う中で、相互の対等性を維持して、活動は相手側の人材養成が主体で、“援助”側はあくまで自助の“支援”者に過ぎないということである。

今回の研修は、国際協力事業団の仕事の一つであり、海外援助の理念をより具体的に示すプロジェクト方式技術協力の現場の視察が中心であった。視察した場所は、SIRIM (Standards and Industrial Research Institute of Malaysia) と JICA のファインセラミックプロジェクト、UPM (University Pertanian Malaysia) と JICA のバイオテクノロジープロジェクト、SOFODA (Sabah Forestry Development Authority) と JICA のサバ州造林技術開発訓練計画、シンガポール AI (人口知能) センターの4カ所のプロジェクトであった。各プロジェクトは5年間の期限付のプロジェクトで現地の研究機関と JICA の共同研究計画で、現地政府の資金と JICA からの機材供与のもとに、現地の研究者と日本からの派遣専門家によって共同研究が進められている。いずれのプロジェクトもそれぞれ特色のある研究がすすめられており、参考になることが多かったが、その中で日本の海外援助協力について私が色々と考えさせられ、教材化したいと考えているサバ州技術開発訓練計画の視察を中心にして、以下自分の考えを整理したいと思う。

2. サバ州技術開発訓練計画の視察を通して考えたこと

われわれ12名の視察団はクアラルンプール市内の視察を終えて、8月25日(日)シンガポール経由でボルネオ島のマレーシア領サバ州の州都コタキナバルに入った。自分にとって、こうした機会がなければほとんど訪れることのないであろう、ボルネオ島に足を置いたことに、多少の興奮を覚えた。ボルネオ島がインドネシアとマレーシアに分かれ、西部海岸の中部には産油国のブルネイ王国があることは知っていた。そして、この島はオランウータンの自生地であり、ラワン材の輸出地である等の多少の知識を持っている島ではあった。そして日本への木材輸出等でこの島の自然の破壊が進んでおり、自然保護や野性動物の保護等が叫ばれ、日本の乱開発が責められている島であることも知ってはいた。

しかし、こうした知識のある島ではあるが自分の中では、東南アジアの島の一つにしか過ぎず、そこに人間生活が行われているという当然の理解を持つことのなかった島である。こうした認識しかなかったボルネオ島の一角のコタキナバルに到着し、州政府の高層建築の庁舎や野菜市場を見るなかで、ここが人間生活の一つの舞台であるという当然の認識を初めて持つことが出来た。

そして、8月26日(月)に視察したSOFODA & JICAのサバ州造林開発訓練計画の視察で、私は、海外援助について多くのことを考える材料を得た。このプロジェクトは、1987年3月から1992年3月までの5年間に『展示林の造成を通じて造林技術の開発改良及び技術者訓練を行い、早生樹種による森林施業体系を確立し、サバ州の森林資源の維持増強に寄与する。』ことを目的としている。

プロジェクトの実施されている場所はサバ州キナールト村(コタキナバル市より南西約30km)の州道、鉄道、湿地に囲まれたゴム園の跡地、約500haである。

計画の実施体制は、州開発局長を総裁として、日本側が4名の専門家と1名の調整員、マレーシア側はプロジェクトマネージャーのもとに7名の専門家と1名の業務調整員で構成されている。

この計画は、サバ州の財政の過半を占める木材輸出及び関連産業の基盤であ

る森林資源が、近年の商業的伐採や大規模農園造成、過度の焼畑移動耕作などにより近年急速に減少劣化しているなかで、州政府がSOFODAを設立し（1976年）、造林を進めているなかで立てられたものである。それは、農業放棄地や伐採跡地への造林の推進のなかで、造林のための中堅技術者の養成と造林技術の開発改良が急務であるとして、日本への技術協力要請を受けて、JICAの事前調査をもとに始められた計画である。

この計画の推進に見られるように、青年協力隊の派遣を含むJICAの活動は、あくまで当事国の要請を土台に、当事国の人材養成を主体として、その社会の長期的な発展を視野においたものであることを、私はこの研修で知った。

そして、この造林計画の現場で出会うことが出来たように、当事国の人材養成の支援という仕事を自分の任務として、黙々と働いている日本からの派遣者がマレーシアだけでも100名以上居られることに深い敬意を持った。この地道な国際協力の姿は、日本国内ではあまり知らされることは無いが、こうした人々の、協力の姿と協力の意味を、しっかりと教育の場で伝えていくことの必要性を教えられた。

サバ造林計画は、造林技術の開発改良と造林中堅技術者養成の教育・訓練の二つの内容をもって進められている。本年は計画4年目に当り、500haの造林地の多くはアカシアマンギウムを中心に植林が進められており、造林地を結ぶ10kmの林道も建設されていた。この造林の中心となっているアカシアマンギウムは、種を撒いてから1年で1mも成長し、6年目には10m位に成長する成育の早い樹で（最大は30mに成長）、経済採算性が期待できる樹であるとのことである。

われわれは、この造林計画場を、日本側のチームリーダーの国井忠氏と森林管理専門家・中村毅氏の案内で見学を行った。

国井氏の説明で私が一番興味を持ったのは次の言葉であった。

それは、

「ボルネオ島の商業的木材の伐採について、日本では森林資源の減少と自然破壊という観点で批判があり、日本からの新聞記者の取材もそうした環境破壊を中心とした取材が中心となっている。そして日本では自然環境保護の観点でボルネオ島の森林伐採の中止と森林の回復が叫ばれている。そしてこの

造林計画も、こうした森林回復の視点で理解される傾向があるが、ここで行われていることは森林回復や自然保護を目的とするものではなく、商業的採算性のある造林計画の推進ということである。日本では木材の伐採が即自然破壊とされているが、ボルネオ島の緑の自然は依然存在しており、問題とされるのは経済採算性のある木材が少なくなっていることである。マレーシアにとって単なる緑の自然はそれだけでは人間生活の向上には役立たず、先進国の人々が、現在の自然の維持を環境保護の観点からのみ主張することは、そこに生きている人々を無視した主張となる。その為、マレーシア政府は、サバ・サラワク両州への新聞記者の入国を厳しく制限しており、航空写真の撮影も禁止している。これは自然破壊の現状を隠蔽しようとするものではなく、先進国の一方的偽善主義的環境保護論に対する批判の姿勢からきているものである。

すなわち、マレーシアにとって必要なのは、人々の生活向上と結び付く森林維持であり、単なる原生林のままの森林維持ではない。」という言葉である。この言葉は私にとって、海外協力の意味を考える上で大きな意味を持つものとなった。

確かに、ボルネオ島の森林伐採について、日本では自然破壊の観点で批判的に報道されている。そして現実として、経済採算性のある輸出用の木材は減少しており、現在は輸出用の木材の伐採は内陸の不便な場所に移り、経済採算性が無くなりつつある。このことは、木材の輸入国である日本にとって困ることであると共に、輸出国であるマレーシアも困ることになっている。このことは私も理解していたが、輸出木材の減少と森林の減少とは必ずしも一致しないということは、この研修で初めて教えられた。マレーシアにとって問題は緑の森林の減少ではなく、経済採算性のある森林の減少であり、この経済採算性のある森林の造林が問題とされているのである。こうした当事国の立場に立って物を考え理解していく姿勢は、持たねばならないと理念的には分かっていたが、現実の自分の中にはこれまで持つことの少なかった視点である。

そしてこうした、経済採算性のある造林の為の計画が、サバ州造林技術開発訓練計画である。そのため、この造林計画では、痩せた土地でも早く成長し10年位で伐採可能な経済採算性のある樹種の研究開発に中心が置かれている。

そして4年間の取組みの中で、アカシアマンギュームが最適な樹として選ばれてきている。この樹は将来チップとして利用でき、家具材としても枝切りをしっかりとすれば利用できるとのことである。

この造林計画に対して、われわれから、森林の乱伐によって減少したいわゆる、ラワン材（フタバガキ類）の造林はどうなっているかの質問を行ったが、その答えは次のようなものであった。

「確かに、そうした造林も原生林の回復ということでは必要であろう。しかし、フタバガキ類は伐採可能な状態になるには100年は必要で、しかも成木は数十m平方に1本ということで、経済採算性から無理な面がある。また、種子は6～7年に1回しか採取出来ず、しかも地面に落ちた種子は、1カ月放っておくと発芽率が極端に悪くなり、造林事業としても種子の確保等から困難さが有る。実験としては、フタバガキ類の育苗と植林は行っているが、これはあくまで研究ということである」

そしてまた、

「現在こうして、経済採算性のある造林の計画と中堅技術者の育成を進めているが、2020年に先進国の仲間入りをするという国家目標を掲げているマレーシアにおいて、10年後に森林労働者が確保できるかは疑問である。しかしサバ州にとっては森林資源を利用しての工業化は必要なことである。いずれにしても、このプロジェクトを含めて、日本の海外協力は、当事国の立場に立った開発援助が中心でなければならない。」ということも付け加えられた。これらの国井氏の海外協力の現場に視点を置いた発言は、学ぶことの多い言葉であった。

このサバ造林計画プロジェクトの視察は、これまで述べてきたように、私自身に海外協力の意味をはっきりとさせていく上で大きな意味をもった視察であった。

その他のプロジェクトの視察でも色々と学ぶことが多かったが、その中でバイオテクノロジープロジェクトで学んだことを一つ記しておく。

それは、日本から派遣された専門家が、JICAより供与された研究機器をさして、

「これらの機器は、日本の自分の研究室では中々買って貰えない機器が多く、学生の使用している実験器具なんか、自分の大学では1台しかないものです。

こうした機器の充実という面ではJICAの貢献は大きく、日本でもJICAの協力を得たいぐらいです」という言葉である。

この言葉は、私が最初に整理した、日本の海外協力の意味を的確に示している。それは、援助は対等の関係に依る人材養成の支援であり、支援においては相手側が不足しているものを補って、あくまでも両者の関係において対等性を維持する努力が必要であるということである。すなわち日本の専門家の、「設備面では日本の研究所の施設よりはいいものがある」といわれることは、設備面では日本と対等であるという意味になり、同じ設備で同じ研究を進め、その国の基礎研究の水準を国際レベルに上げていく支援が、真の国際協力の姿であることを私はやっと理解出来た。

3. おわりに

この9日間の研修旅行は、私にとって本当に意義あるものであった。日本の国際協力の実態の一部を視察するなかで、国際協力の意味と理念を考えることができた。そして、発展途上国といわれてきた、マレーシア・シンガポールの社会は急速に変化して来ていることを実感として感じる事ができた。(私は24年前に一度、シンガポールを尋ねたことがあったが、24年ぶりのシンガポールの外観は全く違ったものになっていた。ただ、自分が1泊した小さなホテルが残っていたことには感激した)

そして、マレーシア・シンガポール社会で見た、多様な民族の共存の状態については、民族と国家という観点からの整理という、今後の自分のもう一つの課題を見つけた。

そして、日本の海外協力・援助の内容も相手国の要請で年々変化していることも知った。このことに関しての例としては、マレーシアに派遣される青年海外協力隊の職種が、初期の農業を中心とした職種から、マレーシア社会の経済発展に応じて、日本語教師、養護学校教師等の福祉関係に移っていることが掲げられる。

いずれにしても、自分にこうした機会を与えて下さった、国際協力事業団と懇切丁寧に説明と世話をして下さい、現地の事務所の職員の方及び各プロジェクトの専門家の方々に深く感謝の意を示したいと思う。

最後に、気になりつつ自分で途中発言出来なかったことを記して、報告を終えたいと思う。

これは、人材養成の支援と各社会理解という観点で私なりに考えた、ちょっとした事柄であり、誰が良いとか悪いということではない。

それは、コタキナバルでのことである。われわれはコタキナバルでは、現地の観光バスで移動し、ガイドはJILUS という青年であった。彼は英語とともに独力で日本語を勉強し、われわれに対して日本語で色々説明をし、サバ州の状況について沢山の情報をその説明から得ることが出来た。そして彼はまた、われわれと日本語で会話することで日本語の会話力をつける努力を一生懸命行っており、彼との日本語の会話は、彼の日本語ガイドとしての力量の養成に多少なりとも役だったのではないかと思う。こうしたなかで、2日目にバスでサバ造林プロジェクトの見学にいったが、道中の案内は、JILUS 氏でなく、現地の日本人専門家が行って下さった。この方とすれば、われわれに出来るだけ判り易く、コタキナバルの歴史や現状を理解してもらおうとの親切心からの説明であり、そのご親切には深く感謝するところである。

しかし、私には造林計画の概要の説明は別として、コタキナバルの街の様子や戦前の日本軍の行動や戦後のこの街の状況等は、日本人からではなく現地のガイド氏から現地の視点での説明を期待していた。しかし、マイクは日本の専門家の手に握られたままで、しょぼんと座っているガイドのJILUS 氏の姿が痛ましく思えてきた。彼は、この自分の置かれている状態をどのように思っているのであろうか聞いてみたい気がした。そして、出来たら彼にマイクを渡して欲しいと叫びたかったが、それも出来ないままに終わった。

他の人々がどう考えられたかは別であるが、私はガイドとして1日の仕事をしようと張り切っていたJILUS 氏からその仕事を奪っていることを批判しつつも、結局、そのことを認めてしまった私の姿勢の中に、発展途上国といわれる社会の人々に対する何等かの尊大さがあつたのではないかと恥じているところである。彼はその日、ほとんど日本語を使うことなく、静かにバスの座席に座っていた。

次の日、彼はわれわれを飛行場に送っていくバスの中で、昨日の気持を晴すように、マレーシア国家・サバ州歌・キナバル山の歌等を大声で歌って、われわれへの送別の気持を示してくれた。

私は、このJILUS氏が大声で歌う国歌の声の中に、彼の人間として叫びを感じた気がした。そしてその歌声を聞きながら、この研修の意義と、国際協力の意味を自分の中で整理していった。

今後は、この研修で得たことをもとに、教育現場で国際理解とは何か、国際協力とは何かをはっきりとさせて、国際理解教育を推進していく覚悟である。